茨城県

# 笠間市

# 市勢要覧

2023

# 発刊にあたって

笠間市は、長い歴史と風土に育まれた豊かな文化があり、医療や福祉、学び、スポーツなどの暮らしやすい環境も整った、魅力のある都市です。

現在、国全体で人口減少や少子・高齢化が急速に進み、また新型コロナウイルス感染症対策も大きな転換期を迎えています。本市では将来像を「文化交流都市～未来への挑戦～」とし、「持続可能性の向上」、「社会変化への対応強化」、「DXの加速化」の3つを方針に掲げ、さまざまな課題を克服し、まちづくりへの「挑戦」を続けています。

## ”文化交流都市 笠間“は「未来への挑戦」を続けていきます

未来に向かって果敢に「挑戦」していくためには、多様な主体の交流・連携と人財の活用が必要です。

市勢要覧は、本市の歴史や風土とともに、人物や季節、街並みなどを紹介し、本市の魅力と将来像を存分にお伝えする内容となっています。

本要覧を通して、一人でも多くの方が笠間に魅力を感じ、新たな時代へ、未来に向かって共に挑戦していただければ幸いです。

笠間市長
山口仲樹

# 目次

## 街


02 わが街、探訪記　自転車回遊編

12 「障がいがあっても、輝ける世界がある」――。
そんなパラスポーツの魅力を郷里から伝えたい。
大沼 和彦さん●パラクライマー

14 この街の伝統と歴史を背負って、
今、素直に作陶の楽しさを感じる。
伊藤 慶子さん●陶芸家

16 地域に開かれた農業するなら、打ってつけ。
この街ならではの「きのこ園」、ここにあり。
川島 拓さん●田村きのこ園二代目茸匠

18 才能は、小さくても、無限大。
郷里の校庭を走る勇姿、世界へ。
佐藤 風雅さん●陸上競技選手

## 人

## 暦


20 春
陽気で鮮やかな自然の彩りに　春の祭りに笑顔が華やぐ

22 夏
夏だ、祭りだ、わっしょい！伝統と歴史の熱い街へようこそ

24 秋
この街の秋は、毎週末、何処かで楽しい何かがあなたを待っている

26 冬
ゆく年とくる年を穏やかに、厳かに　街とともに、家族とともに

## 楽


28 わが街、創る、魅せる

30 わが街、楽しむ

32 わが街、味わう

34 笠間の栗

36 笠間の偉人　ゆかりの人

38 数字で見る笠間市のすがた

40 笠間市地図／笠間市民憲章／市章／笠間市の「花・木・鳥」

## 食

元号が令和へと変わり、変容する世界の流れに遅れまいと国際化が進む昨今。茨城県においても、海外との取引や外国人の往来が活発になる中で、新型コロナウイルス感染症の拡大や、世界情勢の変化に伴う物価の高騰など、私たちを取りまく環境は大きく様変わりした。このような世の中にあって誰もが求める「幸せ」とは何だろうか。

今、この世の中の潮流にあって、わが街・笠間を見つめてみると、この街を訪ねる多くの人びとの笑顔のゆえんがわかるような気がしてならない。

A Photo Report of Bike Riding in Kasama

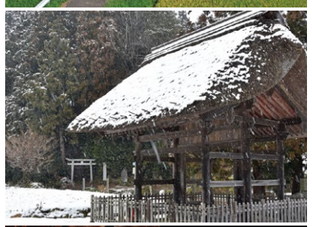
# わが街、探訪記

## 自転車回遊編

### 笠間の歴史
（概要）

明治四年七月の廃藩置県で、笠間藩は笠間県に、隣接する宍戸藩は宍戸県となり、同年十一月に両県は統合されて茨城県となる。旧笠間城下町は笠間町と改称され、明治二十二年、水戸鉄道（現・ＪＲ水戸線）が開通すると、笠間駅と大田町駅（開業後、宍戸駅と改称）が設置され、鉄道網が整備されていく。六年後に水戸鉄道は日本鉄道（現・ＪＲ常磐線）に譲渡され、「土浦線」が開通すると、「岩間駅」ならびに水戸線と接続する「友部駅」が設置された。大正十二年には郡制が廃止され、岩間村は「岩間町」に。戦後、宍戸町の一部であった南友部は駅周辺の繁栄とともに発展し、昭和三十年に宍戸町などと合併して「友部町」が誕生。笠間町は、昭和三十年に大池田村などと合併、昭和三十三年には稲田町と合併し、同年市制施行となった。

そして平成十八年三月十九日、昭和・平成と発展を遂げてきた旧笠間市・旧友部町・旧岩間町が合併し、新笠間市が誕生した。



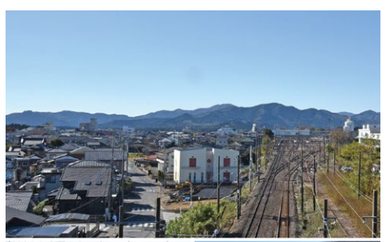
爽快な青空が、笠間にはよく似合う。

笠間市は「日本三大稲荷」の一つとして名高い笠間稲荷神社や、二五〇年の歩みを誇る笠間焼など、脈々と流れる歴史と伝統が受け継がれる街。四季の豊かさを感じさせる山々と森林に囲まれ、里山と田園の光景に人びとの営みが温かく映る街。交通網に恵まれ、「行き来する人びとを迎えてはもてなすことに長けた市民と賑わい」が人との交流を育む街―様々な顔を持つ街だ。そんな街をゆっくりと自転車で旅してみた。爽快な青空のもと、気分は心地よい風とともになびく。

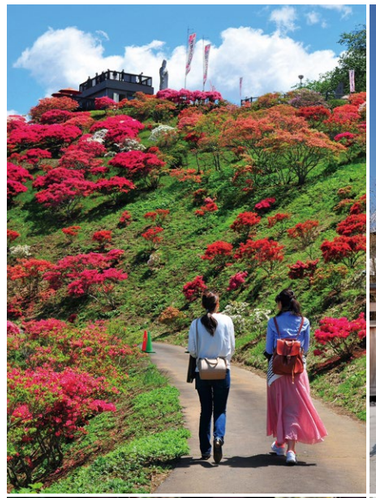
始点はＪＲ常磐線とＪＲ水戸線が合流する友部駅。この駅を含めて、笠間市にはＪＲ常磐線の岩間駅、水戸線の宍戸駅、笠間駅、稲田駅、福原駅と六つの駅がある。今回は友部駅に設置されているシェアサイクルを利用してみよう。友部駅からは常磐線の特急（下り）のダイヤに合わせて「かさま観光周遊バス」も運行されている。

友部駅の北口をスタートし、水戸線沿いに西へ二キロほど走ると、宍戸駅がある。ＮＨＫ大河ドラマ『鎌倉殿の13人』でも描かれた御家人の一人・八田知家（常陸守護職）の四男・家政が領地とし、その名を「宍戸氏」と称したことから「宍戸荘」と呼ばれたのが、この地である。江戸時代には、徳川家康の十一男で水戸徳川家の祖である徳川頼房の第七子・頼雄（水戸光圀の弟）がこの地を拝領し、この地を治め宍戸藩が成立した。中世の歴史は、宍戸城跡や陣屋跡など、今も地域の誇りとして敬われている。なお、

宍戸城跡は、土塁の一部だけ残っていて、その上に末廣稲荷神社がある。歴史民俗資料館（写真下）には宍戸城の絵図などが展示されている。



市内の観光拠点間を移動する交通手段として、笠間市で導入しているシェアサイクル（電動アシスト付自転車）は、友部駅北口、道の駅かさま、笠間駅、笠間芸術の森公園（笠間工芸の丘）、かさま歴史交流館井筒屋に設置されている。利用には、事前にアプリでの会員登録が必要。

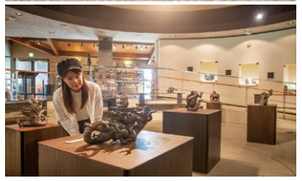


陣屋の長屋門形式の表門は岩間地区に移築され、県の文化財に指定されている。

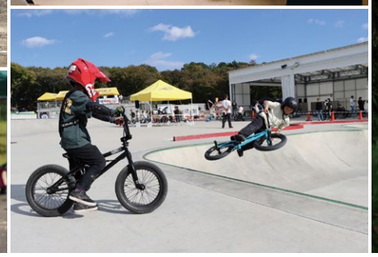
最初の目的地は、令和三年九月にオープンした「**道の駅かさま**（写真①）」。常磐自動車道「岩間IC」および北関東自動車道「友部IC」から笠間芸術の森公園や市街地へと続く国道三五五号沿いに位置する当施設には、笠間の栗専門のカフェをはじめ、地元の食材が味わえるレストラン、新鮮な農産物・農産加工品のほか土産品などがずらりと並ぶ直売所がある（詳しくは28頁参照）。また、道の駅の道路向かいにある「**笠間栗ファクトリー**（写真②）」では、風味豊かな笠間の栗のペーストを製造。笠間市内外のスイーツメーカー等へ出荷され、美味しい栗菓子に生まれ変わる。

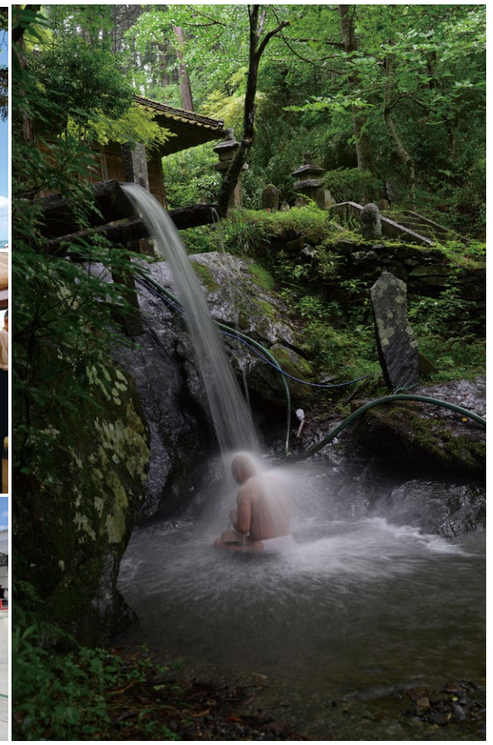
笠間の「食」の魅力に後ろ髪を引かれながら自転車を走らせると、ほどなく「**笠間芸術の森公園**」への右折の標識が見えてくる。「伝統工芸と新しい造形美術」をテーマとした「陶芸の街・笠間」の拠点がここにある。園内には「**茨城県陶芸美術館**（写真③）」があり、陶芸や工芸に関する作品を展示。全国でも数少ない陶芸に特化した当美術館ならではの企画展も好評だ。陶芸体験ができる「**笠間工芸の丘・クラフトヒルズ**（写真④）」や、全国屈指の陶芸教育施設「**茨城県立笠間陶芸大学校**」が隣接する（笠間焼関連施設の詳細は30頁参照）。

広大な公園は、イベント広場、野外コンサート広場、大型複合遊具などのある「あそびの杜」など、市民の憩いの場として親しまれている。県内最大規模のイベントの一つ「笠間の陶炎祭（ひまつり）」もここで開催されている。「かさま新栗まつり」「笠間浪漫」など季節の恒例行事の多くもここで催され、訪れる多くの人びとを楽しませてくれる。



笠間芸術の森公園には、Wi-Fi設備が完備。無線LAN機能を搭載したノートパソコンやスマートフォン等があれば、イベント広場、あそびの杜、ムラサキパークかさまでインターネットに接続できる。IDは「IBARAKI-FREE-WI-FI」、パスワードは「ibarakiken」。





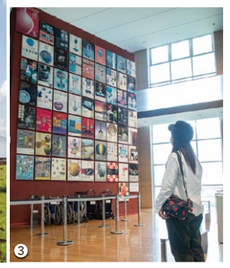
東京五輪二〇二〇に合わせて、令和三年四月にはスケートボードの国際大会が開催できる国内最大規模のスケートパーク「**ムラサキパークかさま**」がオープン。新たな賑わいと楽しさを創造・発信しながら、街は進化し続ける。

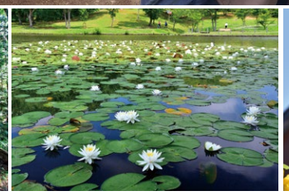
その進化を遡るように、芸術と陶芸の丘から笠間藩の下屋敷跡のある「**佐白山ろく公園**」へ向かった。ここで少し笠間の地理について紹介したい。

茨城県のほぼ中央部に位置する笠間市は、北から西、南にかけて山に囲まれている。北部から西部にかけての栃木県との境には八溝山地の鶏足山塊が延び、国見山（三九一M）や仏頂山（四三〇M）が連なる。西部から南部にかけては筑波山塊があり、吾国山（五一八M）や難台山（五五二M）、火防信仰で知られる愛宕山（三〇六M）がある。この笠間盆地の中央に位置し、街を一望できる佐白山（一八二M）の山頂に、承久元年（一二一九年）、笠間城が建てられた。築いたのは、藤原姓宇都宮氏の一族として常陸国笠間に入り、十八代に渡ってこの地を治めた笠間氏の祖・時朝（ときとも）である。

時朝は、恵まれた体格から武勇に優れていたが、歌人としても名高く、『前長門守時朝入京田舎打聞集』という私撰集を編さん、その写本は現在、宮内庁書陵部に所蔵されている。仏教においても、京都蓮華王院（三十三間堂）に千手観音像二体（一二〇号像・一六九号像）を寄進したのは有名である。市内には、石寺地内に弥勒仏立像、笠間氏の菩提寺として自らが中興した楞厳寺に千手観音立像、岩谷寺に薬師如来立像を寄進。それぞれ国の重要文化財に指定されている。

歴史の風情漂う佐白山ろく公園には、山頂に至る登山道がある。





佐白山ろく公園に自転車を停め、銀杏など木々を眺め散策しながら、笠間城主下屋敷跡の碑や時鐘を通り抜けると、笠間城跡へ登る山道が見えてくる。登り口に隣接する「**治功神社**」の鳥居が立ち、その奥には社殿が静かに佇んでいる。

佐白山には堀の跡や石垣が残されていて、山頂の天守曲輪には佐志能神社がある。なお、笠間城の本丸八幡台上にあった「八幡台櫓」は明治時代に真浄寺へ移設され、今も七面堂として使われている。

公園の坂道を下ると、モダンな建物が見えてくる。「**笠間日動美術館**（写真⑤）」だ。東京・銀座にある日動画廊の創業者、長谷川仁・林子夫妻が長谷川家ゆかりの地である笠間に創設した、日本を代表する画商の系列美術館である。モネ、ドガ、ルノワールなど印象派作品をはじめ、近代ヨーロッパ美術の巨匠が描いた作品が数多く展示されている。また、三四〇余点におよぶ国内外の著名画家が愛用したパレット画コレクションは、美術史的にも貴重な、世界に類を見ない所蔵・展示品となっている。

また、笠間日動美術館のすぐ隣には、大きな銅像が目に留まる。「忠臣蔵」で知られる**大石内蔵助の像**（写真⑥）だ。大石家が仕えた浅野氏は元笠間藩主で、内蔵助の祖父・大石良欽は笠間藩家老だった。浅野氏はのちに赤穂へ転封。その半世紀後にあの赤穂浪士の討ち入りが起こる。浪士たちとの絆は、今も姉妹都市として、赤穂市民との交流に受け継がれている。

そして、「**笠間稲荷神社**（写真⑦）」へ。笠間の歴史や観光情報の発信拠点となっている「**かさま歴史交流館井筒屋**（写真⑧）」の正面が笠間稲荷神社に通じる門前通り。その名の通り、古くから多くの参拝客で賑わう老舗や時世を先駆けるおしゃれな店舗が軒を連ね、甘い香りが漂ってくる。

社伝によれば、笠間稲荷神社は、孝徳天皇御代（白雉二年（六五一年））に創建された。当時、この地には胡桃の密林があり、そこに稲荷大神が祀られていたことから、「胡桃下稲荷」とも呼ばれる。御祭神は「宇迦之御魂神」で、殖産興業の守護神。菊まつりや初詣など、年間三五〇万人の参拝客で賑わう（「笠間の菊まつり」の詳細は24頁を参照）。

周辺には市立の笠間公民館や市民体育館、笠間図書館などの公共施設があり、また、地元商業者を中心とする専門店とイオン笠間店、映画館などの複合施設「**笠間ショッピングセンター ポレポレシティ**」などの大型商業施設が国道五〇号沿いに並ぶ。

ここから走ること二〇分あまり。平安時代に編纂された『延喜式神名帳』に常陸国七社の宮に数えられた名神大社「稲田神社」の神域へ。そして昨今、SNSで話題の日本最大級の稲田御影石の採掘場「**石切山脈**」へと向かった。

水戸鉄道（現在の水戸線）の開通に向けて、その敷設工事にこの地の花崗石が大量に運び出されたのが稲田御影石の採掘の発端だ。明治二十二年（一八八九年）に同鉄道が開通すると、笠間の酒造業と笠間稲荷神社の出資により有限会社が設立され、堅く美しい良質な稲田の花崗岩は「笠間石」の名称で採掘、販売が始まった。その後、県外から多くの企業も進出し、笠間の石は建築用

笠間稲荷門前通りには笠間名物いなり寿司、胡桃饅頭など、一口美味しい食べ歩きにぴったりなお店が並ぶ。詳細は門前通り専用サイト参照。
http://kasapura.jp/monzen/

材として、国会議事堂や最高裁判所、日本橋、東京駅など国内の多くの歴史的建造物に使われ、その気品と美しさの礎となっている。今日、この採石場跡の景観はあたかも古代遺跡のようで、訪れる人びとを驚かせてくれる。

壮大な景色を眺めながら敷地内のカフェでくつろいだ後、ここから一気に、愛宕山の麓へと向かおう。なお、稲田地区には他にも、浄土真宗の宗祖・親鸞が『教行信証』の草稿本を撰述したと伝えられる「西念寺」、福原地区には国内最大級の大しめ縄で知られる「常陸国出雲大社」がある。

途上、吾国山の麓、本戸地区へさしかかると、滞在型市民農園「笠間クラインガルテン」の三角屋根が目に留まる。クラインガルテンとは、ドイツ語で「小さな庭」。都市生活では庭になかなか接する機会が無い生活を営む人びとのために、草花や野菜を栽培する、または器を作ることで土に親しんでもらおうというコンセプトで、笠間の歴史・園芸・芸術のライフスタイルを堪能できる施設となっている。

緩やかな上り下り、場所によっては結構気張る上り坂もあって、**愛宕山麓**のある岩間地区への自転車の旅は、少し汗ばむ。笠間は盆地だということを実感する。県内で最もゴルフ場の多い街の一つである所以かと思いつつ、国内男子ツアーのメジャートーナメント「日本ゴルフツアー選手権」が開催される宍戸ヒルズカントリークラブの前を通り過ぎた。坂道が下りに転じると、愛宕山の穏やかな頂が見えてくる。

笠間といえば、何と言っても「栗」。笠間市内には栗畑が広がっている。茨城県は全国第一位を誇る栗の生産地であり、その質と量を支えているのが、この笠間の栗である。その他、この地域では梨やいちごなど果樹の栽培も盛んだ。そして、お米も美味しい。

国道三五五号西側にあたる岩間の上郷地区には田園地帯が広がり、穏やかな里山の原風景が残っている。北側にある館岸山（二五六メートル）には、南北朝時代の常陸における最後の戦いといわれる小田氏の乱で上杉方が陣を張ったと伝わる館岸城跡がある。裾には、笠間市最古の円面硯（市指定文化財）や国分寺瓦など多数の遺跡が出土し、羽梨山神社や奈良時代の創建と伝わる普賢院の他、平安時代創建と伝わる安国寺など、この地域の長い歴史を物語る。

愛宕山頂には、大同元年（八〇六年）に創建されたと伝わる愛宕神社がある。ここには、天狗伝説があり、天狗にまつわる史跡が多い。神社の奥にある飯綱神社には、「十三天狗の祠」と呼ばれる石があり、年の暮れに愛宕神社の総代たちが天狗に扮し、供物をしながら祠を回る奇祭「悪態まつり」が開催されている。

令和二年、山頂にはグランピングテントなどを整備した、空に近い森のアウトドアリゾート「ETOWA KASAMA（エトワ カサマ）」がオープンした。その眺望は格別で、夜景やご来光の美しさは市内随一だろう。

筑波山地域ジオパークの吾国山・愛宕山ジオサイトに指定されている愛宕山・難台山・吾国山のハイキングコースは、アップダウンが多く、数ある市内のハイキングコースの中でも健脚者向き。そして春爛漫の五月上旬に花咲く自生のすずらん群生は一見の価値あり。

岩間地区でもう一つ訪ねたかったのが

愛宕山の東側には「あたご天狗通り」や「すずらんロード」など古くからの商店街がある。岩間駅に隣接する地域交流センターいわま「あたご」には、愛宕山への観光拠点としてシャワールームなどが設置されている。

笠間市は、夏は気温・湿度が高く、冬は乾燥した晴天が多い太平洋型の気候。7月・8月の平均気温は24.4℃～25.6℃、1月・2月は2.4℃～3.3℃。風速は年間平均で1.1m/sと穏やかで、サイクリングなどは通年で楽しめる（気象庁・1991年～2020年のデータより）。

**「合気神社」**。合気道の開祖・植芝盛平翁が創建した世界唯一の合気道の神社である。約一四〇の国と地域で鍛錬に励む合気道家たちから「合気道の聖地」と呼ばれ、毎年春に行われる例大祭には、奉納演武が披露される。

旅の最後に、**「筑波海軍航空隊記念館」**へ向かった。北関東自動車道の友部ICを出て正面、まっすぐ走る通りがこの記念館へと続く。

筑波海軍航空隊記念館は、国内最大規模で現存する戦争の遺構として知られ、特に特攻という悲劇を後世に伝える重要な遺産である。旧筑波海軍特攻隊史跡を一般公開しながら、若い世代へ戦争の記憶を継承する役割を果たしている。

夕刻、笠間市役所本庁舎などがある友部地区へ戻り、友部駅南口へ。最後に**地域交流センターともべ「Ｔｏｍｏａ」**へ到着した。マルチホールの他、会議室、市民活動サロン・カフェなどを兼ね備え、駅を利用する高校生たちにも人気の交流拠点だ。岩間駅西口には地域交流センターいわま「あたご」が隣接し、それぞれ、地域の活性化に生かされている。

ありのままの笠間を深呼吸しながら辿った一日。折々の賑わいと景色は、時代によって、季節によって異なるものの、その味わいは不変で唯一無双。訪れる人びとにも、住んでいる人にも、いつもと違う視点から、改めてこの街の良さを感じてもらい、この街に響く、力強い鼓動から元気と活力を感じてほしい。（了）

モデル：水越恭子・笠間サイクルガイド

＊当紀行でのルートは、実際に自転車で走行可能なものですが、モデルコースではありません。笠間での自転車モデルコースはこちらからご参照ください。
http://kasapura.jp/cycle/

筑波海軍航空隊記念館は、平成25年（2013年）に公開された映画『永遠の0』の物語上の舞台、撮影地として注目を集め、現存する海軍航空隊司令部庁舎や関連資料を展示している。

The refreshing blue sky fits the atmosphere of Kasama – a city of valuable heritage and the home to a vibrant local citizenry.

With each cycle of the calendar, the four seasons display a different view of the natural landscape. From a playground for sports, to a field ripe for harvest, one can see and experience the existing harmony between nature and the many generations of people who built, preserved, and continue to build the city of Kasama.

From its most notable shrine to its modern-day transportation system, visitors will find this city enchanting and exciting. It is home to Kasama Inari Shrine, which is one of Japan's major Inari shrines. Kasama also has 250 years history of pottery industry, called Kasama yaki in Japanese. Blessed with convenient means of transportation, the city provide easy access to a variety of traditional sites, as well as more modern entertainment venues,

Yet there is so much more to explore in this city of Kasama. As if feeling its heartbeat, I ventured a leisurely bicycle trip, seeking a network of other points of interest.

Starting at the north exit of Tomobe Station and running west along the JR Mito Line for about two kilometers, I stopped at Michi-no-Eki Kasama for my first visit of this bike ride. The facility of Michi-no-Eki Kasama is full of tasty original menus and foods, such as sweet, chestnuts, as well as fresh and processed agricultural products.

Going further along Route 355, I arrived in Kasama geijutsu-no-Mori Park. As the Kasama yaki bases, there are many facilities related with pottery arts, such as Ibaraki Ceramic Art Museum, Kasama Crafthills, and Ibaraki Prefectural Kasama College of ceramic Art. The park also has an event plaza, an outdoor concert stage, and a large complex playground (with equipment), making it a popular place for local citizens and visitors. One of the prefecture's largest events, Kasama Himatsuri Pottery Festival (from late April through early May), is also held here annually. One of Japan's largest skateparks, Murasaki Park Kasama, opened in 2021, and is visited by people of all ages.

After crossing the Crafthills Kasama I dropped at Sashiro Sanroku Park where the trailhead to Sashiro mountain is located. At the top of the mountain, Sashino Shrine is built on the site where Kasama Castle's tower once stood. Kasama Nichido Museum of Art is located down the hill of Sashiro Sanroku Park. On display are Impressionist works such as Monet, Degas, and Renoir, as well as many works by modern European masters.

The street in front of Kasama History Exchange Center Izutsuya is the main avenue leading to Kasama Inari Shrine. The long-established stores give many visitors enjoyable time within a historical atmosphere. According to the Shrine's record, Kasama Inari Shrine was founded in 651, and the enshrined deity is "Ukanomitama no Kami," the guardian deity of the industry. Every autumn, the chrysanthemum festival is held here, drawing around 3.5 million visitors each year, including New Year's visitors.

Next, I headed to the Ishikiri granite Quarry, a popular spot on social media these days. It is one of the largest quarries in Japan and the hard, beautiful, high-quality Inada granite is mined in this area. The Kasama stones are used as a building material for many historical buildings in Japan, such as the National Diet Building, the Supreme Court, Nihonbashi, and JR Tokyo Station.

I cycled through Kasama Kleingarten, a residential community garden, to the foot of Mt. Atago, which is filled with the blessings of nature in Kasama. Having encountered mild ascents and descents during most of my trip, cycling to the Iwama area caused a bit of hard breathing and some heart thumping–it reminded me that Kasama is a basin and one of the towns with the most golf courses in the prefecture.

Yet there is the beauty of the agricultural fields in the basin. Chestnut fields are scattered here and there in Iwama, producing the raw materials for the famous Kasama chestnut cakes that can be tasted all over the city. The rice in Kasama is also delicious because of the region's abundant water and ideal soil. The countryside that spreads out at the foot of Mt. Atago is beautiful, as if it symbolizes the rich nature in this city.

Atago Shrine, which is said to have been built in 806, is located on the top of Atago. There is a legend that Tengu, a long-nosed goblin-like creature, lived here, and many historical sites relate to this legend. The view from the top of the mountain is exceptional. The sparkling night view and the beauty of the sunrise are probably the best in the city. In 2020, an outdoor glamping resort, ETOWA KASAMA, opened here, adding a touch of modernity to contrast with the historical legend of Teagu.

The hiking course from Mt. Atago to Mt. Wagakuni via Mt. Nandai has been designated as the Mt. Wagakuni-Mt. Atago Geosite. In the Iwama area, one can visit Aiki Shrine, the only shrine in the world dedicated to Aikido, created by Morihei Ueshiba.

The last stop on my trip was Tsukuba Navy Air Corps Memorial Hall, known as one of the largest scales of war heritages in Japan. It is an especially important legacy that should be inherited to future generations to never forget the tragedy of the Kamikaze suicide attack during the World War II.

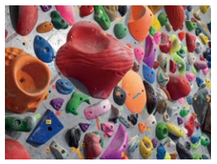
The scenery of Kasama changes with the times and seasons, but its flavor is unchanging and unique. To all, I wish to send the passion and vitality of the powerful heartbeat echoing in this city.

# 「障がいがあっても、輝ける世界がある」――。そんなパラスポーツの魅力を郷里から伝えたい。

**競技人生の始まりは、自宅の木登りから。ボルダリングの魅力に取り憑かれて楽しかった壁登りが事故で潰えた、と思われた。今は、片手での挑戦。両手で登っていた課題は登れない。目の前の壁を睨みながら、自分なりの登り方を模索した。一つひとつの課題を克服し、障がいを抱えて挑んだ世界で待っていたのは、ワールドカップの金メダル。頂からの景色は、右手の感覚を失う前には経験したことのない輝きがあった。**

## 大沼 和彦さん

パラクライマー



子どもの頃から木登りが好きで、実家の庭にあった木によく登って遊んだりしたんですよ。ワンパクで、よく叱られました（笑）。大工になりたくて工業高校へ進学して、部活は山岳部。クライミングに特化した、県内では珍しい部活で、毎日のロープクライミングでの練習が今のパラクライミングに生きています。

卒業後、大工の職に就いたのですが、二年で退職。しばらく派遣で仕事をしながら、「きちんと資格を身につけて人のためになる仕事をしよう」と決めて、看護専門学校へ進学しました。ボルダリングは趣味で続けていて、ジムなどに定期的に通いながら、充実した学生時代を過ごして、年が明けたら、いよいよ国家試験。事故に遭ったのは、そんな秋の頃、バイク仲間とツーリングをしているときでした。病院のベッドで目が覚めて右腕の感覚がないことに気づいたとき、事態を理解しましたが、何があったのか、事故当時の記憶は今も欠けたままです。

退院後、「もうボルダリングもできないな」と思いながら、それでも壁を見たくなるんですね。通っていたジムに足を運んで、事故後初めてホールドに触れた時の感覚は、言葉では言い表せません。胸を突かれたというか。もうできないという気持ちより、怪我をしていても登れるかも、と気づいた瞬間でした。

「パラクライミング」があることを教えてくれたのは、事故を起こしてしまったツーリングに同行していた仲間です。定期的に開かれている障がい者向けのイベントに同行してくれて、ずっと支えてくれました。長く親しくしている高校の山岳部の先輩が笠間にこのジム（ボルダリングジムｖｏｒｔｅｘ）をオープンして、来店される人たちにクライミングの楽しさなどを伝える機会を与えてくれたのも、励みになりました。

パラクライマーとして競技に参加する決意をしたのは、平成三十一年（二〇一九年）の二月。事故から三年後の冬でした。

令和四年（二〇二二年）六月のパラクライミング・ワールドカップ（W杯）に出場することが決まったときには、ジムで知り合った市職員の方が非常に喜んでくれて、笠間市のスポーツ奨励金の制度を紹介してくれました。スポンサーのない選手は渡航費なども自費になるので、この制度はありがたかったです。そのW杯で初優勝して、金メダルを持って、お世話になった方々に報告ができたのは、本当に嬉しかったです。そして何より、いつも好きなようにやらせてくれた両親に感謝したいです。

看護師の資格は事故後きちんと取得して、現在は看護師として特別養護老人ホームで働きながら、パラスポーツの普及と発見に繋がるよう、自分の姿を通じてSNSに投稿・発信しています。

実は、笠間はボルダリングやロッククライミングには適した土地柄で、ツルツルした、加工していない天然の岩壁がたくさんあります。将来、ここでパラクライミングの世界大会を開けたら素晴らしいだろうな。そんな夢を描きながら活動しています。（了）

大沼　和彦（おおぬま・かずひこ）
1986年笠間市（旧友部町）生まれ。
水戸工業高校で山岳部に所属。クライミングに魅了される。卒業後、建築業を経て、看護師をめざすが、バイク事故で右腕に障がいを負う。その後、知人のジムなどでクライミングの魅力を伝えながら、みずからもパラクライミングの競技に参加。2022年6月にオーストリア・インスブルックで開かれたパラクライミングのワールドカップに出場。男子上肢機能障害のAU 1クラス（最も障害が重いクラス）で見事、初優勝を果たした。看護師として働きながら、障害者スポーツのPRに努めている。

取材協力：ボルダリングジム vortex

# この街の伝統と歴史を背負って、今、素直に作陶の楽しさを感じる。

**笠間焼発祥の窯元で生まれた。その生い立ちと生業をすべて受け入れなければならなかった半生。焼き物を作る技術も日常生活で身につけた。だから、「陶芸家」と呼ばれるのは、今でもなんとなく小恥ずかしい。でも、陶芸に興味を持って街を訪れる人たちと交わるのはとっても楽しい。「人が好き」と笑顔で語るとき、多くの人が行き交ったこうば（工場）での思い出が鮮やかに蘇る。**

## 伊藤 慶子さん

陶芸家

伊藤　慶子（いとう・けいこ）
陶芸家。久野陶園 14 代目。
1960 年、笠間焼元祖の窯元久野陶園に生まれる。愛知県立瀬戸窯業高等学校陶芸専攻科卒業後、結婚を期に個人作家として作陶活動を再開。陶炎祭やクラフトフェアなど、市内のイベントに参加する傍ら、個展やグループ展を開催。2007 年、先代の死去により久野陶園を継承。こうば屋根や付帯設備の老朽化が進む中、市内の有志らを中心に、施設の再生と存続を目的にクラウドファンディング（CF）を立ち上げ、現在、その支援金をもとに修復が進み、ギャラリースペースなどを新設する計画が進んでいる。

笠間で生まれ育って、子どもの頃の思い出といえば、母家に隣接するこうばの世界です。

こうばに行くと、父や職人さんたちをはじめ、たくさんの人が出入りしていて。みんな近くに住んでいたので、忙しいときは奥さんたちもほっかぶりして窯づめとか窯出しとかのお手伝いに来ました。私が生まれる前はこうばの二階で寝泊まりしている職人さんもいたそうです。

賑やかで、活気があって、みんな何かしら作っていて。小さい頃は遊び道具はなく、テレビもなかったので、遊び場といえば、こうばか裏山。あちこち裸足でチョロチョロして、いたずらして、何か壊して怒られる、というのが日課でした（笑）。拍子木があって、始業の時や、お茶の時間にカンカンと鳴らすのが母家の者の役目。時々、「やらせて」とせがんで、上手く音が鳴ると嬉しかったのをよく覚えています。

小学生くらいになると、手伝いも日常茶飯事。当時、水戸の偕楽園の梅酒が入った、麻紐付きの徳利をたくさん出荷していて、中学の頃からは祖母と一緒に毎週末、石膏での鋳込みの作業や乾燥作業。思い出すとうんざりするくらいです（笑）。

こうば中心の生活、それが自然でした。ですから、「後継ぎ」になるのも自然に決まっていて、それがたまらなく嫌で。「後を継ぐんだよ」と言われるのが疎ましくて、誰も知らない土地に行きたかった。とにかく、家を出たかった。でも、ものづくりは好きでしたね。

県外の窯業の学校を出て、二十二歳のときに家に戻りましたが、結婚を機に家を出て、娘を授かり、新しい生活が始まりました。焼き物から離れ、「普通の生活がしたい」と、事務の仕事に就いたこともあったのですが、どこか物足りなくて。動いて作業をするのが好きなんですね。板金塗装の仕事に就いたとき、社長の奥さんに「伊藤さんは焼き物ができるんだから、自分で始めてみたら」と薦められて、結局、借りていた家の庭に小さな窯を作って、焼き物を始めちゃいましたね。

平成十四年（二〇〇二年）に父が亡くなって、それからですね、時々、戻るようになったのは。がらんとしたこうば、父がいないこうばには違和感がありました。「荒らしたくないな」と思って、屋根の修理を機会に、自分の作業場をこちらに移しました。

笠間焼といえば昔は、柿釉（かきゆう）をかけたため・すり鉢の日常品、食器などでしたが、今は新しい作家さんたちがたくさん笠間で創作活動をしていて、作品もバラエティに富んでいます。伝統だけにとらわれない、寛容な土地柄なのでしょうね。

若い作家さんが純粋な気持ちで自分の求める作品を作る姿を見ていると、「そうだよね」と感動を覚えます。私は門前小僧のように作業は覚えてしまいましたから、作り方は知っていても、焼き物に対しては「好きにならなくちゃ」と自分に強いる時期が長くて。五十を過ぎてからですね、自然な気持ちで好きだと感じるようになったのは。それがわかって、今、作ることがとても楽しいです。（了）

# 地域に開かれた農業するなら、打ってつけ。この街ならではの「きのこ園」、ここにあり。

**親方の長年の経験と目利きで「福王しいたけ」というブランド椎茸を全国に発送・直売する。気難しい「きのこ」を相手に、直売にこだわるのは、顧客との会話を大切にしたいから。この見事な椎茸を親方の代で終わらせたくない。親方と後継者の思いを一身に受けて大きく育つ椎茸は、この街の新しいブランド品である。半世紀以上も年の差がある二人の二人三脚農業には、どこか新鮮で、温かく、そして優しさが宿っている。**

## 川島　拓さん

田村きのこ園二代目茸匠

隣の小美玉市の出身です。笠間のように自然豊かな土地で、子どもの頃から山登りや、植物、生き物に囲まれて育ちました。大学も生命科学の分野で農業を学べる学部へ進学しました。畑などを耕すサークルに所属して、農家でアルバイトなどをするうちに、農業で身を立てる決心をしました。

最初は、笠間で就農するなら、栗、自然薯も面白いなと思いました。有機農法にこだわっている農家さんもたくさんいて、面白そうだなと。大規模経営が増える中で、笠間の農業は多様性豊かだなと感じますね。

親方の田村仁久郎さんに出会ったのは、笠間市の「地域おこし協力隊」に着任して、市内の農家さんを中心に支援活動をしている時でした。いただいた大きな椎茸がステーキみたいに美味しくて。直径十センチ、厚さ三センチもある肉厚な椎茸は、昭和天皇に献上したり、農林水産大臣賞を受賞したりするなど、椎茸栽培歴六十年のベテラン茸匠の田村さん自慢のきのこです。でも、後継する人がいないので「自分の代で栽培は辞めるつもり」と言っていたのを思い出して、「なくなっちゃって、いいのかな」と考えた末、後を継ぎたいと申し出たんです。

きのこは、奥が深いですね。植物なら、葉っぱが茶色くなったら、「ああ、あの症状だな」とわかるのですが、きのこは、植物のように芽が出て花が咲いて実がなって、とはいかず、生育がはっきり見えないんです。出てくればどんどん出てきますけど、出ない時は本当に静か。出たと思っていると、急にへそを曲げちゃう。なかなか読めない難しさがあります。

川島　拓（かわしま・ひらく）
田村きのこ園二代目茸匠
1994 年茨城県小美玉市生まれ。筑波大学生命環境学群在学中、農業に携わる。卒業後、農業経営を学ぶことを目標に、金融機関に就職。北海道で二年間、農業融資を担当した後、笠間市の「地域おこし協力隊」に着任。その活動期間中に田村きのこ園を訪れ、田村仁久郎さん（写真右）に弟子入りを申し出て、2022 年 4 月に田村きのこ園を第三者継承した。

原木の椎茸栽培は、木の大きさや自然環境任せで、あまり手を加える余地がないのですが、ここで行っている菌床栽培は、菌床の配合や管理の仕方で、味も、形も、姿も大きく変わります。そこに作り甲斐があって面白いんです。

親方はお客さんと話をするのが大好きなので、令和三年（二〇二一年）、敷地にあった倉庫を改装して直売所を作りました。地域に開かれた空間にしたいと思って力を入れています。

笠間で農業をする利点は、お客さんとの接点が持ちやすいこと。陶炎祭や笠間浪漫など季節ごとに大きなイベントがあり、「道の駅かさま」やゴルフ場などへ来た人が、ついでに直売所を訪ねてくれる。県内でこれだけの集客がある地域はないんじゃないでしょうか。陶芸家さんや飲食店さんなど、いろいろな人と一緒にコラボでき、そして何より、シニア層が元気なのがいいですね。

今までは外から見ている立場でしたが、自分が生産者になって経営者の視点で考えるようになり、ワクワクすることが増えた反面、胃が痛くなる思いも出てきましたね。親方には「美味しいものを育てて売れば、大丈夫」と励まされています。まだまだ学ぶことばかりですが、自分たちの椎茸は日本一の美味しさだと自信を持って作っています。（了）

注：「地域おこし協力隊」は、総務省が二〇〇九年度から取り組んでいる制度。一年から三年の期間、都市部から地方へ移住し、地域力の維持・強化を目的とした支援活動を行う。笠間市では二〇一三年度から取り組んでいる。

# 才能は、小さくても、無限大。郷里の校庭を走る勇姿、世界へ。

**みずからを「遅咲きの選手」と評する。26 歳で陸上の名門「ミズノ」に移籍するのも、異例のことだ。中学、高校、大学、社会人と、陸上の舞台を駆け上がるたびに、そのレベルの高さに驚き、戸惑い、辛苦を味わいながらも、常に地道な努力で乗り越え、みずからの成長に繋げてきた。原動力は、「勝つ」ことの喜び。郷里の学校内に始まり、県内で、国内で勝利した今、次の目標は世界だ。**

## 佐藤 風雅さん

陸上競技選手

佐藤　風雅（さとう・ふうが）
1996 年笠間市生まれ。笠間市立友部中学校、茨城県立中央高等学校、作新学院大学を経て、（株）那須環境技術センター（本社･栃木県那須塩原市）で社会人陸上の世界へ。種目は 400m。自己ベスト記録は 45 秒 40（2022 年 5 月・セイコーゴールデングランプリ東京）で日本歴代 8 位。主な競技歴として、2020 年日本選手権 400m 3 位、2021 年日本選手権 400m 5 位。2022 年にはセイコーグランプリ東京 400m 2 位、日本選手権 400m で優勝、世界選手権 400m では準決勝進出、同選手権 1600m リレーでは第一走者として日本新記録（アジア新記録）で 4 位に貢献した。2023 年 4 月より「ミズノトラッククラブ」に移籍。

子どもの頃から走るのが好きでした。走って、「勝つ」ことが好きだったんです。

父は、元陸上競技選手。インターハイにも出場した実績を持っていて、子どもながらに、「僕も（父の能力を）受け継いで速くなるはず」と信じていました。小学校に入った当初はたしかに同級生の誰にも負けない走りだったのですが、人よりちょっと成長が遅かったせいか、走るのは速くても、「一番」ではなくなっていくんですね。次第に、足の速さを生かしたスポーツのほうで頑張ろうと思うようになって、中学校では野球部に所属しました。

体格がまわりの級友たちに追いついたのは中学三年生の頃。そのタイミングで学校内の陸上競技大会で優勝したんです。久しぶりに勝つことの喜びを味わって、県大会に出場。自分が真剣に向き合えることに出会えた喜びと自信が今も生き続けています。

高校で本格的に陸上を始めたのですが、最初は全く結果が出なくて。「自分の力って、このくらいなのかな」と落ち込むばかりでした。でも、練習を続けていくうちに、だんだん結果が出てくるようになって、高校二年生の時に初めて関東大会に出場。高校三年生の時には県大会で優勝しました。ですから、大学で陸上部に入った時は、「そこそこはやれるだろう」と思っていたら、大間違い。県大会優勝のレベルでは、まったく通用しない。「大学（の陸上部内）で通用しないのだから、全国なんか通用するはずがない」と思い知らされました。

その頃からですね、自分の立ち位置というものを意識するようになったのは。自分の位置を確認して練習を繰り返し、「まず身近なところから一番になろう」と。まずは百メートル、次は二百メートルで、というように。

僕は、遅咲きの選手です。速い選手を見ると、「持って生まれた才能があるんだな」と、自分の才能の無さを嘆いたものです。「コーチに恵まれているんだろうな」とか。でも、それは言い訳。大学で競った選手たちを見て、彼らが自分よりはるかに練習していること、自分の努力が足りていないこと、自分が本気になりきていなかったことを自覚させてくれました。

国内から世界へと意識を変えたのは、東京五輪の時でした。社会人選手二年目の時に、世界大会の代表に選ばれるようなトップレベルの選手に勝つ機会があって。自分の走る原点である「勝つ」ことの喜びを再認識できたんです。令和二年（二〇二〇年）、コロナ禍で五輪は延期。選手の多くがコロナに翻弄されてモチベーションの維持に苦労していた時期に、僕は記録が伸びたこともあって、次の目標に向けて自分のスタイルを作り始めることでモチベーションを維持できたんです。東京五輪への出場は逃しましたが、五輪翌年の令和四年（二〇二二年）、日本選手権の四百メートルで優勝、世界選手権に初めて出場して、四百メートルで準決勝に進むことができました。

二〇二五年には、パリ五輪、東京での世界陸上競技選手権大会があります。これからの三年間が僕の人生の勝負どころ。僕がもともと持っている才能は大きなものではありません。そんな小さな才能を努力して開花させてきた、その信念を持って努力し続けることが必ず世界での活躍につながると信じて頑張っています。（了）

取材協力・写真提供：那須環境技術センター

# 陽気で鮮やかな自然の彩りに 春の祭りに笑顔が華やぐ

**自然の生命、その息吹と鼓動を感じながら春を迎えるこの街は、花々に満ちている。**
**その彩りに躍る心が人を呼び、その歓びが春の祭りへと駆り立てるようだ。**
**笠間の春の賑わいがここから始まる。**

笠間には四季折々の楽しみがあるが、とりわけ春の景色は生き生きとした色彩に満たされ、気持ちを華やかにさせてくれる。生命力あふれる自然の豊かさに加えて、訪れる人を楽しませてくれる恒例の祭りがたくさんあるからだ。

笠間で「お花見」といえば、北山公園と愛宕山。なお、愛宕山では桜まつりが開催されている。

北山公園は、ソメイヨシノや八重桜、枝垂桜など千本余りの桜が美しい。展望台からは冬を終えた樹木の芽吹きを三百六十度パノラマで楽しむことができる。

愛宕山も、桜の名所として長く親しまれている。二千本のさまざまな桜が山を包み、麓から山頂に建つ愛宕神社周辺にかけて、品種の異なる桜が時期を変えながら開花し、牡丹桜などゴールデンウイークの時期まで長くお花見を楽しめる。

佐白山に連なる小さな富士山は、つつじの名所である。約八千五百本におよぶ壮大な花山の景色は、昭和四十二年（一九六七年）に植えられた千株のつつじに始まる。市民の協力を得て「つつじ一株寄付運動」が発足、翌年から「つつじまつり」が開催された。四月中旬から五月上旬にかけて、山一面つつじに包まれた壮大な花山が見頃を迎える。

その他、佐白山ろく公園、八坂神社、「笠間ショッピングセンターポレポレシティ」近郊を流れる涸沼川の桜並木、稲田神社、筑波海軍航空隊記念館などの桜も見応えがある。

五月に咲く笠間稲荷神社の藤の花もこの季節の風物詩だ。境内にある樹齢四百年におよぶ「二株の藤樹」は、例年五月上旬が見頃。「八重の藤」は根周り約五・三メートル、枝張り約十五メートルの大きさがあり、茨城県内でも随一で、昭和四十二年に県の天然記念物に指定されている。もう一株の「大藤」は、一重咲きの花穂の長さが一メートルにもなり、藤の甘酸っぱい香りを境内に漂わせる。

こうした花々の咲き誇る中で、この街の最大イベントである「笠間の陶炎祭（ひまつり）」が開催される。二〇〇を超える窯元などが一堂に介して、会場となる笠間芸術の森公園は笠間焼の作り手たちのテントでびっしり。創造と個性が結集する陶芸の祭典は、毎年多くの来客で賑わう。メインステージではライブパフォーマンスやワークショップなども開催され、お祭り一色で楽しめる催しとなっている。

**笠間の陶炎祭**
昭和57年（1982年）、笠間芸術の村の空き地で36軒の窯元たちが、手づくりの野焼き窯を囲んで笠間焼や食べ物を売るところから始まった。40年を越える歴史を経た今、200人を超える陶芸家が作品を並べ、多くの来場者で賑わう県内最大規模のイベントとなっている。
**時期：4月29日～5月5日**
**場所：笠間芸術の森公園**

**笠間つつじまつり**
約7haの園内には、さまざまな品種のつつじが植えられており、最盛期に小高い山一面が真っ赤に染まる。期間中は苗木の即売やイベント等が開催されている。
**時期：例年4月中旬～5月上旬**
**場所：笠間つつじ公園**

**北山公園の桜**
ソメイヨシノや八重桜、枝垂桜など1,000本余りの桜で賑わう。
**時期：例年 4 月上旬**
**場所：北山公園**

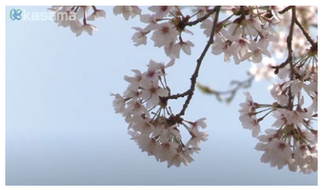
**愛宕山 桜まつり**
火防信仰で知られる愛宕山は桜の名所。ソメイヨシノ・山桜など約20種類、約2,000本の桜が4月上旬から開花する。
**時期：例年 3 月下旬～ 5 月上旬**
**場所：愛宕山**

**難台山のすずらん群生地**
愛宕山-難台山-吾国山ハイキングコースの、難台山-道祖神峠間のルートからほど近い東側に日本古来の自生のすずらん群生地がある。
**時期：例年 5 月中旬**
**場所：愛宕山 - 難台山 - 吾国山ハイキングコース**

**大藤・八重の藤**
花房が最長で1.5メートルになる「大藤」と、葡萄の房のように花を咲かせる「八重の藤」は、いずれも樹齢400年あまり。「八重の藤」は県の天然記念物に指定されている。
**時期：例年 5 月上旬**
**場所：笠間稲荷神社**

**合気神社 例大祭**
合気神社は、昭和19年（1944年）に合気道の開祖 植芝盛平翁によって創建。現在約140の国と地域に広がる合気道の、世界で唯一の神社で、「合気道の聖地」と敬愛されている。
**時期：例年 4 月 29 日**
**場所：合気神社**

**おすすめ動画**
**「桜まつり」**



笠間市には多くの桜の名所があり、ソメイヨシノ、山桜からはじまり、枝垂桜や八重桜などの桜を長い期間楽しむことができる。

# 夏だ、祭りだ、わっしょい！<br>伝統と歴史の熱い街へようこそ

**夏は祭りの季節であるとともに、祈りの季節でもある。**
**歴史ある祭事が多いこの街の敬虔（けいけん）な人びとの思いは、額に汗して熱く、**
**街のそこかしこにこだまする。**
**暑い笠間の夏、元気な笑顔が眩しい。**

新緑美しいこの街の初夏の恒例イベントは、ゴルフ愛好家お待ちかねの「日本ゴルフツアー選手権」。日本四大メジャーゴルフツアーの一つで、毎年六月に宍戸ヒルズカントリークラブで開催されている。多くの市民がボランティアで参加するこのツアーに合わせて、同カントリークラブのイベント広場では「グリーンフェスタかさま」が開催される。マーチングバンドの演奏の他、ステージイベント、笠間の食や特産品などの模擬店、百ヤードいなり寿司巻き挑戦などが大会を盛り上げる。

そして夏祭りの季節がやってくる。筆頭は八雲神社の夏季例祭だ。

八雲神社は、明治三十四年（一九〇一年）、小原神社（永徳元年に鹿島神宮から分霊を迎えて創建された小原地区の由緒ある神社）の分社として創建された。夏季例祭は、例年七月下旬の週末に友部駅前通りを歩行者天国として開かれ、太鼓や神輿など、町内を沸かせる夏祭りとなっている。

宍戸の平神社は天治元年（一一二四年）に創建された古社で、笠間でもっとも歴史ある祇園祭を守り継ぐ。古くからのしきたりに則り、「當家（とうけ）」廻りの伝統が祭りを取りしきる。清い身で渡御に臨むため、當家は一年間胡瓜と川魚を食することを禁じられ、「渡御中、会話はまかりならぬ」など厳格な決まりごとを守る。神輿は宍戸古来の上町、中町、下町、橋爪の四町から担ぎ出され、それぞれの地域安全、商売繁盛を祈りながら、町内を練り歩く。

歴史ある夏祭りは八坂神社祇園祭で頂点に達する。約七五〇年前の鎌倉時代、建長六年（一二五四年）に、笠間城主・笠間時朝公が下野国（現・栃木県）茂木の小貫郷天王森に鎮座する牛頭天王社を領地の石井村石井原天皇塚に遷宮させ、領民の難病削除の祈願をさせたのが当祭礼の興りである。

昭和三十三年（一九五八年）に漆塗り金箔張りに新調された現在の本神輿は、当時「関東一の大神輿」と呼ばれるほどの京神輿で、その豪華さは今も変わらず、この街自慢の風格を保っている。夕刻から歩行者天国となった笠間稲荷門前通りを本神輿と、子供神輿を肩に威勢の良い掛け声が響き渡る。

八坂神社の御祭神は、素戔嗚尊（スサノオノミコト）。創立は貞観年間で、建長6年（1254年）笠間城下石井の天王塚に遷座。天正2年（1574年）に三所神社内に遷宮した後、慶安2年（1649年）、現在の場所に遷座した。古来より常陸国三天王（一の矢天王、水戸の天王、笠間の天王）の一つとされ、明治2年までは、毎年霜月中酉の日に新嘗大祭を行い、祭礼中には稲田神社までの渡御神事があった。明治7年に村社へ列格となった。

**かさまスポーツ＆フードフェス**
日本ゴルフツアー選手権開催期間中に開催される、スポーツと食、花火などが楽しめるイベント。
**時期：6月上旬**
**場所：宍戸ヒルズカントリークラブ**

**八雲神社夏季例祭**
子どもから大人まで、多世代に渡って現在も続く友部地区の夏祭り。勇ましい掛け声とともに関係町内の神輿が渡御する。
**時期：例年７月下旬**
**場所：友部駅前**

**全国こども陶芸展 in かさま**
日本が誇る伝統文化である陶芸に挑んだ全国の子どもたちの陶芸作品を展覧する一大イベント。優れた作品にはさまざまな賞を授与。次世代への陶芸文化の継承を推進している。
**時期：例年７月下旬～８月下旬**
**場所：茨城県陶芸美術館**

**八坂神社祇園祭**
750年の歴史を誇る笠間の夏祭り。笠間領民の難病削除の祈願を行い、領内繁栄を願う神事。夜には、八坂神社の神輿に大人神輿が合流し、祭りは大きく盛り上がる。
**時期：例年８月上旬**
**場所：笠間稲荷門前通りほか**

**おすすめ動画**
**「平神社　祇園祭」**

當家廻りの伝統を継承する歴史ある夏祭り。上町、中町、下町、橋爪の四町で神輿を担ぎ、各町内を練り歩く。

**灯籠流し**
故人を偲ぶ、灯籠流しのひととき。
**時期：例年８月中旬**
**場所：笠間ショッピングセンターポレポレシティ南側亀ケ橋付近**

# この街の秋は、毎週末、何処かで楽しい何かがあなたを待っている

**秋。この街を訪れる人びとは皆、その賑やかな活気に驚かされる。収穫感謝の祭典があれば、歴史ある伝統行事があり、笠間焼の匠を堪能できる催しもあり。自然の恵みと文化の薫りのフルコースが、この街の秋である。**

蒸し暑い夏の日々が、次第にしのぎやすい穏やかな朝夕に変わり始めると、稲穂が垂れ、籾が黄金色に色づき、街は稲刈りの季節を迎える。待っていたかのように、収穫された農作物や果実が街のあちこちに並び始める。笠間の秋は豊かな実りゆえに、ゆっくりと賑やかに流れていく。

「笠間といえば、栗」と言われるくらい、笠間の栗は今や全国屈指のブランド品である。栗の収穫時期に開催される「かさま新栗まつり」は、街を挙げて栗の収穫を祝う恒例行事。生栗や焼き栗をはじめ、栗料理やスイーツ、栗に関連したハンドメイド商品の販売や栗拾い体験など、子どもから大人まで楽しめるイベントが盛りだくさん。「栗」のアイディアレシピコンテスト入賞作品の販売も面白い。

「笠間浪漫」は、この街の産業祭のようなイベントで、「手作り・笠間産・郷土愛・田舎・懐かしい」をテーマに、笠間の魅力を最大限にアピールするお祭りだ。会場となっている笠間芸術の森公園のイベント広場では、笠間焼や木工製品などのクラフトや雑貨、笠間産の農産物やグルメなど、趣向を凝らした企画で来訪者を楽しませてくれる（一例として令和四年（二〇二二年）には台湾フェアや笠間焼ビールフェアなどの屋台が出店）。例年、公園内の野外ステージで同時開催されるビックバンドの野外コンサートなども好評だ。

笠間の秋を語るとき、欠かせないのは菊の花だ。「笠間の菊まつり」は、笠間稲荷神社境内で行われていた「朝顔会（朝顔展示）」がその前身で、当時、戦争で荒廃した人びとの心を和ませることや信仰を育む一助として、先々代の宮司が明治四十一年（一九〇八年）に農園部を設けて、菊花を境内に展示したのが始まり。昭和二十三年（一九四八年）からは「菊人形展」を開催。翌年には、戦後の混乱の時期にもかかわらず、笠間稲荷神社の菊が「アメリカ国際菊花展」（シアトルで開催）に出品され、最優秀賞のブルーリボンを受賞するなど、笠間の歴史に栄誉を刻みながら、企画と工夫を凝らして現在に至っている。毎年十一月三日に開催される流鏑馬もこの街の見応えある伝統行事である。

さらに、秋の伝統行事には六所神社の例大祭もある。岩間地区最大の祭礼で、明治六年（一八七三年）以来の長い歴史がある。当日奏でられる「岩間囃子」は、市の無形民俗文化財に指定されている。

**六所神社例大祭**
明治6年（1873年）、下郷地区の五社を八幡神社に合祀した記念祭礼で、氏子町内から山車や幌獅子が街中を練り歩く岩間地区最大のお祭り。
**時期：例年 11 月第 1 土日**
**場所：六所神社・岩間駅周辺**

**陶と暮らし。**
笠間の陶芸家の「秋の新作」を中心とした陶器市。くらしのワークショップ、出店作家のカップで珈琲が楽しめる陶くらcaféなども開催される。
**時期：例年 11 月中旬**
**場所：笠間工芸の丘 特設会場**

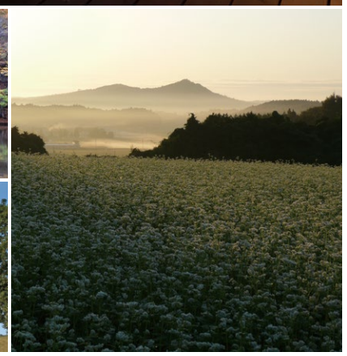
**ふるさとまつり in かさま**
商工会・JA・社会福祉協議会などが共同で開催する行事。特設ステージでは、歌謡ショーやキャラクターショーなどが開かれる。
**時期：例年 10 月下旬**
**場所：友部公民館**

**笠間の菊まつり**
明治41年（1908年）から始まった笠間の菊まつりは、笠間稲荷神社をメイン会場に黄・白・ピンクなど色とりどりの菊が市内に咲き誇る。
**時期：例年 10 月中旬～ 11 月下旬**
**場所：笠間稲荷神社ほか**

**笠間浪漫**
「手作り・笠間産・郷土愛・田舎・懐かしい」をテーマに、田舎の良さ・面白さを前面に出し、来訪者に楽しんでもらうお祭り。
**時期：例年 10 月上旬**
**場所：笠間芸術の森公園**

**かさま新栗まつり**
栗の収穫時期に開催される、生栗・焼き栗・栗菓子など、栗一色でもてなす祭典。
**時期：例年 9 月下旬または 10 月上旬頃**
**場所：笠間芸術の森公園**

近年の「ウィズ コロナ・アフター コロナ」で社会環境が多様化する中、密を避け、自然の中でゆっくり仕事をしたい、美しい星空を家族や友だちと楽しみたい。笠間市は、そんな願いを叶えてくれる街（写真右は公民連携による施設「空に近い森のアウトドアリゾート『ETOWA KASAMA（エトワカサマ）』」）。



**おすすめ動画**
**「流鏑馬」**

小笠原流一門の射手や古武道振興会の人々など総勢40名が的を鏑矢で射て、来年の農業の豊凶を占う。

# ゆく年とくる年を穏やかに、厳かに 街とともに、家族とともに

**田園に霜が降り、街行く人の吐息が白く染まるこの季節、**
**寒さを和らげるぬくもりを誰もが求めるこの季節、温かく寄り添い、**
**ともに春を迎える人がいてほしい、街であってほしい。**
**その願いを心に留めて、この街は人びとともに新しい年を迎える。**

晩秋から初春にかけて、夜半、山間部などを低気圧が通過して湿度が高くなったとき、放射冷却で冷やされて行き場のなくなった空気が盆地など一帯に飽和状態となり、霧が発生する。山頂などから見下ろす、この遥か彼方へ漂う海原のような眺めは「雲海」と呼ばれ、笠間の小高い山々からも観察される。特に朝日に照らされ東方に広がる愛宕山からの雲海の眺望は、筆舌に尽くし難い。

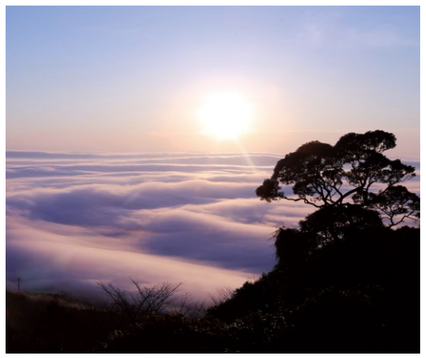
師走を迎えた笠間では、「かさま陶芸の里ハーフマラソン大会」が開催される。笠間芸術の森公園をスタート・ゴールに、最低標高四十三メートル、最高標高七十四メートル（高低差三十一メートル）の全行程二十一・〇九七五キロメートルで笠間を感じることができるコースとなっている。参加賞は笠間焼。気持ちよく汗をかいた後の、ご当地グルメ「笠間いなり寿司」の味は格別だ。

ハーフマラソンでは仮装した走者が沿道の観客を楽しませてくれるが、同じ頃、愛宕神社北側にある飯綱神社では、白装束で天狗の格好をした十三人の天狗が「悪態まつり」を披露する。天狗たちが境内にある十六か所の祠へお供え物をして回る際、参加者たちは「ばかやろう!」「早く歩け!」など罵声を浴びせ合い、お供え物を奪い合うという、一風変わったお祭り。年の終わりに疫病退治を祈願するには打ってつけの奇祭である。

そして、年の瀬。この街もゆく年・くる年を迎える。

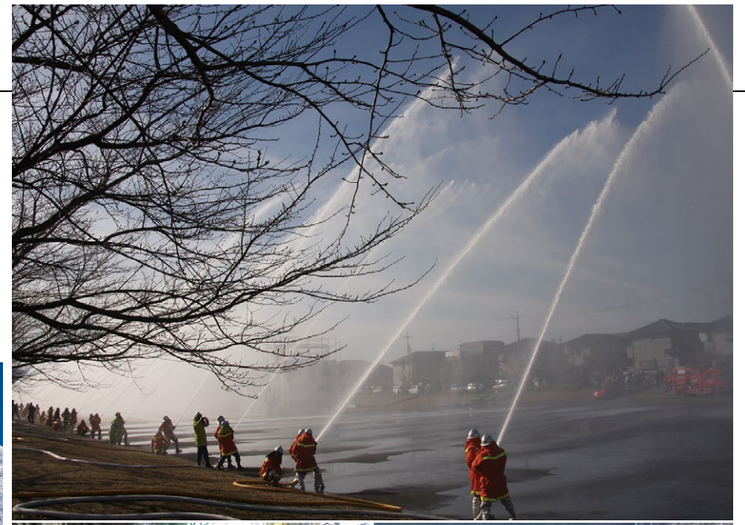
佐白山ろく公園には、寛文二年（一六六二年）から使われている時鐘がある（現在の鐘は三代目）。この街の大晦日の夜は、ここで除夜の鐘を打ち、新年を迎えて、笠間稲荷神社などへ初詣に向かう人びとで賑わう。愛宕神社では、「来年へ歩く会」という催しに参加して、初詣や初日の出を楽しむ人びとも多い。

新春を迎え、初詣客や陶器市（彩初窯市）などで賑わう街は、立春を迎える頃から春が開花する。節分が市内の神社で執り行われ、常陸国出雲大社などの梅の見頃には、市内のいちご農家の出荷が始まる。そして、桃の節句に先駆けて、この街の陶芸家たちが楽しませてくれるのが、オリジナルの陶製雛人形。「かさまの陶雛～桃宴（とうえん）～」と題するこのひな祭りは平成十三年（二〇〇一年）から行われていて、期間中は陶雛人形制作ワークショップを実施する窯元もある。









**悪態まつり**
白装束の天狗に扮した十三天狗が、祀（ほこら）に供え物をして回る儀式で、この間に参加者が悪態を言い合い、天狗に邪魔されながら供え物を奪い合うという奇祭。
**時期：例年 12 月中旬**
**場所：飯綱神社（愛宕神社）**

**かさま陶芸の里ハーフマラソン大会**
全国から集まるマラソン愛好家や市民ランナーを、街全体で応援する。
**時期：例年 12 月中旬**
**場所：笠間芸術の森公園**

## かさま観光周遊バス

友部駅着特急（下り）のダイヤに合わせ友部駅を出発し、笠間工芸の丘、茨城県陶芸美術館、笠間日動美術館、笠間稲荷神社、春風萬里荘、道の駅かさまなど、主要観光施設を巡り、友部駅へ戻る周遊バス。

所要時間：50 分
料金：1 回乗車につき 100 円
　　1 日自由乗車券：300円
（2022年12月1日現在）
＊美術館など 5 施設の入場割引等の特典付き。

**彩初窯市**
年初めに行われる陶器市。毎年60人以上の作家がテントを出し、個性豊かな新作を発表。初詣に訪れた観光客や陶芸ファン、家族連れなどで賑わう。
**時期：例年 1 月 2 日から 5 日**
**場所：笠間工芸の丘特設会場**

**来年へ歩く会**
大晦日の夜、愛宕山山頂の大駐車場から各自参道を歩いて愛宕神社へ。山の上での初詣と初日の出で新春を祝う。記念品配布あり。
**時期：12 月 31 日（大晦日）**
**記念品配布：午後 11 時から翌日午前 0 時半**
**場所：愛宕山**　＊参加費無料・事前申込不要

### おすすめ動画
### 「初午いなり寿司まつり」

初午の日にちなんで、ご当地グルメであるそばいなり寿司の長さ日本一に挑戦するイベントを開催。

**かさまの陶雛～桃宴（とうえん）～**
陶芸家たちが制作したオリジナルの陶製ひな祭り。
**時期：例年 1月下旬～3月初旬**
**場所：市内各地**

**節分追儺式**
正装した約 200 人の撒豆行事司等の手により、宮司家伝統の秘法で調整された金銀福豆と共に福銭等がまかれる。
**時期：例年 2 月 3 日**
**場所：笠間稲荷神社**

笠間市の年間行事について：当コーナー「わが街・暦」で紹介した行事・イベントについては、気候や自然環境の変化、新型コロナウイルス感染症などの影響で、開催時期や場所が変更になる場合があります。最新の情報は笠間市公式ホームページなどから随時ご確認ください。

# わが街、創る、魅せる

Art

**笠間焼は、今日、「自由な作風で知られる陶芸」と評され、この街で陶芸を学び、陶芸作家を志して製陶・創作活動をするために移り住む人びとは後を絶たない。志す人たちを魅了する、この街ならではの陶文化は、多くの教育文化施設に支えられている。**

**茨城県立笠間陶芸大学校**
笠間焼産地の技術力や芸術性、デザイン性、ブランド力の向上と、現代陶芸をリードし、世界に羽ばたけるような人材の輩出を目指している。
**笠間市笠間 2346-3**
**（笠間芸術の森公園内）**
**TEL. 0296-72-0316**

**春風萬里荘**
この街の豊かな緑と盆地特有の四季折々の自然にふさわしい「芸術の村」構想に着手した前館長の長谷川仁氏と旧笠間市は、昭和 40 年、陶芸家として料理や食器の演出にまでこだわった意匠・北大路魯山人の茅葺き民家を北鎌倉より移築し、「春風萬里荘」と命名。現在、笠間日動美術館の分館となっており、周辺には 40 戸ほどのアーティストがアトリエを構えている。
**笠間市下市毛 1371-1**
**TEL. 0296-72-0958**

**茨城県陶芸美術館**
笠間芸術の森公園内にある陶芸専門の美術館。笠間市出身の人間国宝・松井康成をはじめ、日本の近現代陶芸界において優れた業績を残した文化勲章受章者や人間国宝の作品などを展示している。
**笠間市笠間 2345**
**（笠間芸術の森公園内）**
**TEL. 0296-70-0011**

**笠間工芸の丘〜クラフトヒルズ笠間**
陶芸体験をはじめ、陶芸品の常設展示、笠間焼の販売を行っている。ギャラリーでは、笠間焼の作家たちによる企画展が四季折々に催されている。
**笠間市笠間 2388-1（笠間芸術の森公園内）**
**TEL. 0296-70-1313**

江戸時代の安永年間に、久野半右衛門が始めた「箱田焼」と山口勘兵衛が始めた「宍戸焼」が笠間焼の源流と言われています。主に甕やすり鉢などの生活雑器が製造されました。

笠間藩第三代藩主・牧野貞喜と第八代藩主・牧野貞直が積極的に保護・奨励し、生産増加と陶技を後世に継承する目的で貞直が定めた藩の御用窯「仕法窯」に指定された六窯元（久野家、福田家、奥田家など）は今も製陶を続けています。

明治時代の陶器商・田中友三郎の活躍で販路を広げた笠間焼は一気に知名度を上げ、大正末期から昭和初期にかけての不景気や、第二次世界大戦、樹脂・金属製品の台頭などの危機を乗り越えてきました。戦後、窯業に関する幅広い研究と人材育成を目的とする茨城県窯業指導所が設立され、高度成長期には行政・民間が協力し、全国の芸術家を誘致する事業を開始。移住作家と地元の窯元・作家が刺激し合い、交流を深めていく中で、斬新な表現と技法が生まれ、国の伝統的工芸品指定なども追い風となり、先達の技を尊重しながら時代の新しい波を受け入れ、他に類を見ない表現の多様性を持ち、現在に至っています。

伝統的な笠間焼はもちろん、笠間土を使った現代的な表現、さまざまな素材から生まれる新しい技法といった多彩な「顔」が、笠間焼の最大の特徴です。

KASAMAYAKI PORTAL SITE
笠間焼の作家紹介やオンラインショップ、笠間焼関連のイベントなどを発信するサイトです。
https://kasamayaki.org

---

JAPAN HERITAGE 日本遺産

## かさましこ

**〜兄弟産地が紡ぐ〝焼き物語〟〜**

焼き物の街として名高い茨城県笠間市と栃木県益子町＝「かさましこ」。近接するこの地は、古代から須恵器づくりに必要な粘土・水・燃料の木材に恵まれ、古代窯跡からの出土品に共通した技法が多数みられることから、同じ技術圏にあったことが分かっています。

十一世紀に下野国（現在の栃木県）を拠点とし、その後の約五〇〇年間、笠間と益子の地を治めた宇都宮氏は、京都の貴族との接点を持ちながら宗教・文化という側面に大きな足跡を残しました。この時代に「かさましこ」にもたらされた京都・鎌倉からの文化・芸術・気風は、後の笠間焼・益子焼の美意識に影響しています。

十六世紀後半、宇都宮氏が豊臣秀吉によって改易され、江戸時代になると二つの地域はそれぞれの歴史を歩むこととなります。

十八世紀後半、笠間藩上箱田村の名主久野半右衛門がこの村で焼き物を始めます（後の笠間焼）。十九世紀後半には、間黒村鳳台院で寺子屋教育を受けていた大塚啓三郎が、久野窯で陶器の製法を修業し、益子で窯を築きます（益子焼の始まり）。

明治時代になると笠間・益子それぞれで組合が設立され、出荷規格を統一し、連携して製品の融通を図るなど支え合いながら、関東の窯業地として発展。大正時代にかけて、壺、水甕、すり鉢、土鍋などの日用品を製造出荷し、その製品は丈夫で使いやすく安価であったことから、東京を中心に東日本全域にまで販路を拡大することになります。

二つの陶文化の歴史的価値が評価され、令和二年（二〇二〇年）、「かさましこ」は日本遺産に認定。今日、六〇〇名を超える陶芸家が活躍し、暮らしに寄り添う独自の陶文化を継承しています。

笠間焼発祥の地には、震災で全壊した素焼き用登り窯が復元されている（笠間市箱田地区・久野陶園）。

# わが街、楽しむ Sports

コロナ禍でマスク姿を見かける中、感染予防を心がけながら、自然の中で「自分らしさ」を発見し、新しい趣味や余暇の過ごし方を見出した人は多い。

この街には、「コロナに負けない」人びとの強靭な笑顔が絶えない。その充実した時間と高揚感は、沈みがちな生活に一石を投じるライフスタイルを提供し続けている。

**ハイキング**
愛宕山や吾国山など見晴らしの良い山々は日帰りハイキングで人気（写真）。北山公園内にも森林浴などを楽しめる遊歩道コースが複数整備されている。

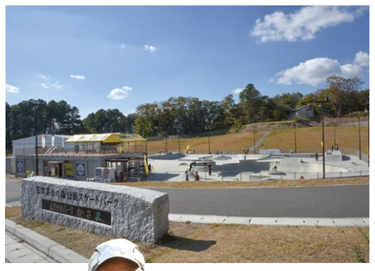
**マラソン**
例年12月に開催される「かさま陶芸の里ハーフマラソン大会」は、笠間芸術の森公園をメイン会場に、全国各地から多くの市民ランナーが参加する。笠間稲荷門前通りをはじめ、笠間焼が並ぶギャラリーロードや自然あふれる山間部を走るなど、この街の自然と歴史を肌で感じることができる。

**合気道**
合気道は、他者と優劣を競うことを目的としないため、試合はない。お互いを尊重するという姿勢を貫き、年齢、性別、国籍を問わず、誰でも稽古できる。

**生涯スポーツ**
市民の誰もが手軽にスポーツに親しみ参加できるよう、生涯スポーツが盛んに行われている。市内各地域には、野球場やサッカー用芝生広場、グラウンドゴルフ場、テニスコートなどが整備され、子どもたちから高齢者まで多世代がそれぞれのスポーツと交流を楽しんでいる（写真は笠間市総合公園テニスコート）。

北山公園　ヘルスロード　ムラサキパーク　サイクリング

**スケートボード＆BMX**
笠間市には国内最大級となる4,600平方メートルのスケートパーク「ムラサキパークかさま」がある。スケートボードの国際大会が開催できる規模で、パーク内は「ストリート」と「パーク」、「フラット＆ビギナーゾーン」、「ミニボウルゾーン」、「屋内ゾーン」の5つのゾーンで構成されている。



**ゴルフ**（写真は宍戸ヒルズカントリークラブ）
市内には9つのゴルフ場がある。2020年東京五輪を契機として、台湾とのゴルフ交流も行っている。また、青少年の健全育成とクオリティの高い価値観・道徳観を涵養することを目的に、スナッグゴルフを推奨している。

**サイクリング**
昨今人気のサイクリングもこの街では盛ん。県外からのバイカーも多く、街では「フォトサイクリングin笠間」などのイベント開催のほか、市認定のサイクルガイドを通じて、自転車の安全な利用拡大と市内周遊を推進するサイクルツーリズムを促進している。

笠間市には自然を満喫しながら爽やかな汗をかくスポーツに適した施設・環境が整っています。コロナ禍にあっても、街の元気が衰えない所以がここにあります。

「ムラサキパークかさま」はスケートボードやBMXなどアーバンスポーツの魅力をエンジョイできる施設。国内随一のコンクリート製で、初心者向けの「フラット＆ビギナーゾーン」、街中の障害物を再現した「ストリートゾーン」、おわん型、山型、斜面などの大小さまざまな構造物を組み合わせた「パークゾーン」、雨天でも利用できる「屋内ゾーン」、「ミニボウルゾーン」の五つのゾーンが設けられています。

また、「ゴルフのまち」でもある笠間市には、日本男子ゴルフメジャー大会「日本ゴルフツアー選手権」の開催地・宍戸ヒルズカントリークラブをはじめとする九つのゴルフ場があります。日本ゴルフ界を牽引する畑岡奈紗選手や星野陸也選手はこの街の出身です。各小学校ではスナッグゴルフも盛んに行われています。

ハイキングやトレッキングもこの街で長く親しまれています。北山公園内には森林浴などを楽しめる遊歩道コースが複数整備され、白鳥湖周囲（一・三キロ）や新池周囲（一・八キロ）などは家族連れで楽しむのに最適なコース。オートキャンプ場やバーベキュー場もあります。いばらきヘルスロードに指定されたコースも十一あり、健康づくりやリフレッシュなど目的にあわせて「歩く」ことを楽しめる街になっています。

# わが街、味わう

Taste

**活龍**
笠間栗モンブランのタンタン麺

**kasama farm's**
常陸姫のハンバーグ

**GELATERIA COWCOW**
濃厚栗ジェラート（プレミアムシングル・写真手前）

**楽栗 La Kuri**
楽栗filo（フィーロ）

**常陸乃國 かぐや姫**
笠間いなり＆お手製うどんセット

北関東自動車道・友部ICから笠間芸術の森公園へ続く国道三五五号沿いに、令和三年（二〇二一年）九月にオープンした「道の駅かさま」。笠間の栗のCafé＆Shopや、新鮮な農作物・お土産品がそろう直売所、地元食材を使用した料理が楽しめるフードコートなどを備え、笠間市の「食」の魅力を存分に発信しています。

茨城県は全国でも農業が盛んな県の一つで、令和二年（二〇二〇年）二月現在の総農家数は全国第二位、農業産出額は全国第三位です。その県の中央部に位置する笠間市は、地形や気候に恵まれ、さまざまな農作物が収穫されています。特に、栗の栽培面積・生産量ともに全国一位を誇る茨城県の中で、笠間市は代表的な栗の産地として知られています。道の駅かさまでは、その栗の魅力を味わえる笠間の栗専門店のほか、フードコート・レストランで地元食材をふんだんに使用したメニューを楽しむことができます。

直売所棟にある「みどりの風」では、地元で採れた新鮮な野菜や果物、ここでしか買えない笠間市のお土産が集結し、多くの観光客で賑わっています。

向かい側にある「笠間栗ファクトリー」の製品も人気の一つ。笠間栗ファクトリーは、「つくる、つながる、笠間の栗」をコンセプトに、安心・安全・高品質な笠間産の栗加工品を笠間市内外のスイーツメーカーや飲食店、カフェなどへ供給しています。

**道の駅かさま**
笠間市手越22-1　TEL：0296-71-5355
駐車場：173台（24時間利用可能な台数）
食事処：
・楽栗 La Kuri　10:00 ～ 18:00（LO 17:30）
・フードコート・レストラン　11:00 ～ 18:00（LO 17:30）
買い物：
・直売所 みどりの風　9:00 ～ 18:00
・コンビニエンスストア　24時間営業
その他の施設（24時間利用可能）：
トイレ、授乳室、道路情報コーナー、EV充電施設
定休日：毎月第2木曜日
ホームページ：https://m-kasama.com/

**【野菜＆果実類】**白菜・人参・大根・ピーマン・バターナッツ・自然薯・里芋・むべ・栗・からしな・いちご
**【加工品】**道の駅かさま限定すいーとまろん（ナガタフーズ）・大根百姓各種（ナガタフーズ）・かさまチップス（鍋屋）・稲荷ゆべし（松島製菓）・おちぼ栗（グリュイエール）・栗マド（グリュイエール）・栗ろーるケーキ（㈱オーヤマ）・くり甘納糖（根本製菓）・栗の輪（くりーむ）・栗のメレンゲクッキー（ポーターハウス）・栗マドレーヌ（パンプルティンク）・生真面目たまごプリン（パンプルティンク）・キムチ各種（キムチ工房かわさき）・くりとろプリン（笠間栗ファクトリー）・笠間の栗プリンカラメル（おみたまプリン）・栗バスクケーキ（宮本製菓）・松緑（特別純米酒：笹目宗兵衛商店）・稲里（大吟醸五百万石：磯蔵酒造）・郷の誉（須藤本家）

# 笠間の栗

**全国でも有数の栗産地である笠間市。**
**栗栽培の始まりは明治末期頃。年間を通して温暖であり、昼夜の温度差や保水性と通気性に優れた火山灰土壌が、ふっくらとして香り高い栗を育むのに適しています。**
**市では生産者への支援や販路拡大、ブランド化など「笠間の栗」産業発展に向けた取り組みを行っています。**

## 栗の生産が盛んな栗のまち

茨城県は栗の栽培面積と生産量が日本一。
笠間は栽培面積と生産者数が全国1位です。

- **栽培面積：484ha** 日本一
- **生産者数（栽培経営体数）：669経営体** 日本一

※農林業センサス2020より

かさま新栗まつり

毎年秋には、栗菓子や栗をモチーフにしたハンドメイド作品の販売などが行われる「かさま新栗まつり」も開催されます。

## 栗の種類

**早生**（9月上旬～中旬）　**中生**（9月下旬～10月上旬）　**晩生**（10月上旬～中旬）

早生（わせ）・中生（なかて）・晩生（おくて）に分けることができ、収穫時期がそれぞれ異なります。

**丹沢** 早生
肩が三角形。つやが無い。

**出雲** 早生
横に張っている。果頂部に薄毛。

**国見** 早生
曲面が長い。座が狭い。

**ぽろたん** 早生
国見、丹沢と類似。切れ目を入れて加熱することで渋皮まで剥ける。果肉はもろいが、色は良い。

**神峰** 早生
横に張って座が広い。暗褐色。

**人丸** 早生
小粒、つやが良い。

**大峰** 早生
中粒、座が狭い。

**利平** 中生
果頂部に細毛が密生。暗褐色。

**筑波** 中生
果頂部に薄毛が生えている。甘味があり香りが良い。

**銀寄** 中生
横に張っている。座が広い。

**石鎚**（いしづち） 晩生
色が淡く、つやがよい。煮崩れが少ない。渋皮煮に適する。

**岸根** 晩生
果頂部に膨らみと薄毛あり。



## 年間の作業

## 「笠間の栗」台湾へ輸出開始

台湾の輸入規制緩和を受け、令和4年8月に栗ペーストの輸出を開始。
令和4年度は約100kgが台湾へ輸出され、ホテルメトロポリタンプレミア台北のアフタヌーンティーで提供されたほか、2月に茨城県が実施した大規模プロモーションでも使用されました。
令和5年度もホテルメトロポリタンプレミア台北において、モンブランとして提供されます。
今後も「笠間の栗」のブランドを国内外に広く伝えていきます。

## かさまKURIスイーツ

愛宕のこぼれモンブラン（栗のいえ）、マロンショコラ（笠間雪みるく）、和モンブラン（㈲松島製菓）、栗甘納豆（湯崎栗園）、笠間のモンブラン（お菓子の店くりーむ）、焼栗「愛宕山（あたごやま）」（笠間の焼栗　愛樹マロン）、いばらきマロンタルト（はたおか製菓）、笠間シューくり・プレミアム（菓子工房 福）、ドルチェ“栗ざんまい”（庭カフェ KULA）、Kasamarron熟成プレミアムモンブラン（kasamarron cafe）、栗あんぱん（森の石窯パン屋さん）、栗蒸し羊羹（ふる川製菓）、栗だんご（有限会社 鍋屋本店）、くりん（グリーンファーム）、栗の渋皮煮

## 栗の むき方・食べ方・保存方法

### むき栗の保存／冷凍

❶20分程度かたゆでする。

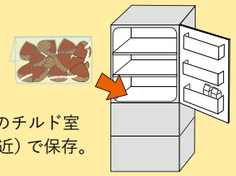
❷流水にさらして熱をとり、むく。

❸ビニール袋に入れ、空気を抜いて冷凍庫で保存。

約半年程度は保存できます。
使う時は解凍せずに、お使いください。

### 生栗の保存／冷蔵

❶ポリエチレン袋に入れ、口をしばらず、折る。栗が乾かないようにする。



❷冷蔵庫のチルド室（0度付近）で保存。

栗はいたみやすい食べ物なので、できるだけ早くお召し上がりください。

### 栗の上手なむき方

❶熱湯に10分つける。

❷おしりから尖った方にむく。

❸渋皮の状態で1～2分ゆでる。

❹渋皮がむきやすいうちにむく。

冷めるとむきにくくなります。

### 基本の食べ方

**【鍋でゆでる場合】**
沸騰してから中火で40～50分。

**【圧力鍋でゆでる場合】**
蒸気が上がってから中火で10～15分。
自然に圧力が抜けるのを待つ。

歴史と伝統が育む人となり。この街も、優れた先人を輩出し、その功績を語り継ぎ、新たな時代、新たな世代を育てて今に至ります。

# 笠間の偉人 ゆかりの人

この地を治め、剣術に、武道に長ける者や、神や仏に仕え、芸を嘗れとし、学者、あるいは哲学者として、この国を支えてきた笠間の偉人を紹介します。

## 親鸞（しんらん）

浄土真宗・宗祖
1173―1262

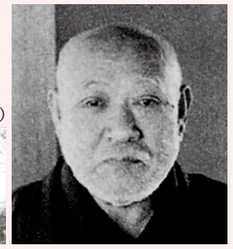
西念寺（稲田）

浄土真宗の聖典を草稿し、宗派の礎を築く

浄土真宗の宗祖。九歳で出家し、二十年に渡る比叡山での修行後、「南無阿弥陀仏」を唱えれば、人はみな極楽浄土に往生できると説く法然の本願念仏の教えに出会う。しかし、旧仏教団の反感から流罪の身に。罪を解かれた後、親鸞は京へは戻らず、一二一四年、笠間郡稲田郷の領主・稲田頼重に招かれ、吹雪谷の地に「草庵」を設け布教活動を行った。主著『教行信証』は、この草庵で撰述された。

## 木村武山（ぎむら ぶざん）

日本画家
1876―1942



岡倉天心のもとで日本画の近代化に尽力

大日堂（箱田）

旧笠間藩士・木村信義の長男として生まれる。武山の号は、笠間のシンボルとも言える佐白山・山上の別称「阿武山」に由来する。東京開成中学校に入学するが、翌年、東京美術学校に編入。同校教授の下村観山の強い影響を受け、一九〇六年に同氏の推挙で岡倉天心や横山大観らとともに、北茨城・五浦に一家をあげて同行する。一九一四年、大観・観山らと共に日本美術院を再興。美術院きってのカラリストと評された。

## 松井康成（まつい こうせい）

陶芸家
1927―2003

笠間の陶芸家として初めての人間国宝

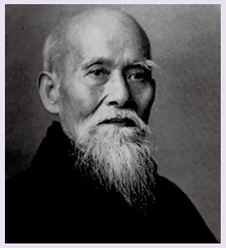
月崇寺（笠間）

長野県に生まれ、戦時中に笠間市に疎開する。大学卒業後、浄土宗月崇寺の住職を継ぎ、そのかたわら、廃窯となっていた山門下の窯を再興し、東洋陶磁の研究に勤しんだ。中国・宋代磁州窯に流れをくむ練上手の技法を研究。釉がはじけて割れる練上嘯裂（しょうれつ）文や象嵌瓷など新たな技法に対し積極的に研究を続け、数多くの賞を受賞する。一九九三年、重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定された。

## 植芝盛平（うえしば もりへい）

合気道開祖
1883―1969

合気神社（吉岡）

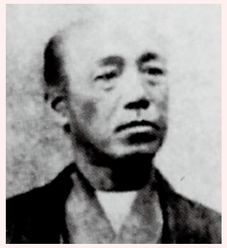


合気道を創始し、国際的武道として世界に広める

現在の和歌山県田辺市の富裕な農家に生まれた。大東流を初めとする柔術・剣術など各武術の修行成果を、独自の精神哲学でまとめ、「和合」、「万有愛護」等を理念とする合気道を創始した。身長一五六センチながら、大相撲力士を投げ飛ばすなど幾つもの武勇伝が残る。老境に至っても多くの〝神技〟を示し「不世出の達人」と謳われた。合気道を国際的武道に育てた功績から紫綬褒章、勲三等瑞宝章などを受賞した。

## 小野友五郎（おの ともごろう）

数学者
1817―1898



笠間城跡（佐白山）

数学を武器に日本の文明開化に貢献

笠間藩の算学者甲斐駒蔵に入門し、和算を修学。江戸詰めになると、甲斐と共に『量地図説』を著す。江戸幕府天文方に出仕し砲術や軍学・オランダ語を学んだ。勝海舟を補佐し航海長として咸臨丸に乗船、米国へ。帰国後、軍艦頭取に。明治政府では民生方面の業務に情熱を注ぎ、珠算の復活を建言。西洋式数学の普及にも努め、尋常小学校用の教科書『新撰洋算初歩』を編纂した。

## 山下りん（やました）

イコン画家
1857―1939

聖名はイリナ。日本人最初のイコン画家

白凛居（笠間）

江戸に出て浮世絵師に学び、工部美術学校に在学中に正教会に改宗。教会より派遣され聖像画家として帝政ロシアの首都・ペテルブルクに留学した。女子修道院でイコン製作技術を学び、帰国後は日本正教会の女子神学校にアトリエを構え、イコン製作に没頭した。一八九一年に竣工したニコライ堂にも作品を残した（関東大震災で焼失）。「ウラジーミルの聖母」など、八十二年の生涯に三百点あまりの聖像を残した。

## 坂本九（さかもと きゅう）

歌手
1941―1985

笠間稲荷神社

「笠間は第二のふるさと」が口癖だった

この街では、正午に「上を向いて歩こう」、夕方に「明日があるさ」のメロディが流れる。坂本九の代表曲だ。坂本の母は大町の出身。坂本家は戦時中、笠間に疎開し、坂本は幼稚園、小学校をここで過ごした。後に、幼稚園にピアノを寄贈、石井台の旧笠間市役所建設に協力し歌謡ショーを開催するなど、この地を第二の故郷と親しんだ。女優・柏木由紀子との挙式は笠間稲荷神社。市内での盛大なパレードは今も語り草だ。

## 笠間ゆかりの作品

笠間の偉人 田中友三郎 漫画制作委員会・笠間市教育委員会発行
『笠間焼中興の祖 田中友三郎』

松井康成著・講談社刊
『涅槃』

今野敏著・講談社刊
『天を測る』

柏木由紀子著・扶桑社刊
『上を向いて歩こう』

## 笠間ゆかりの偉人・ゆかりの人びと

- 村上亘（「剣術の双璧」笠間示現流剣術指南番）
- 山本鉄之丞（「剣術の双璧」笠間藩校剣術師範代）
- 島男也（笠間藩剣法引立世話役）
- 加藤桜老（儒学者・長州藩藩校明倫館教授）
- 相馬主殿（新選組最後の局長）
- 田中友三郎（笠間焼中興の祖）
- 宮田栄助（実業家・宮田製銃所（現宮田工業）創設者）
- 高野公男（作詞家）
- 野沢拓也（サッカー元日本代表）
- 川崎真裕美（競歩選手・アテネオリンピック・北京オリンピック・ロンドンオリンピック女子20km競歩代表）
- 長谷川良信（教育者・淑徳大学設立）
- 安達勇人（歌手・俳優）
- パンチ佐藤（元プロ野球選手・タレント・笠間サポーターズ）
- 星野陸也（プロゴルファー）
- 畑岡奈紗（プロゴルファー）
- 金澤志奈（プロゴルファー）
- 假屋崎省吾（華道家・かさま応援大使）
- 長谷川智恵子（日動画廊 日動美術館副館長・かさま応援大使）
- 柏木由紀子（女優・かさま応援大使）
- 大島花子（歌手・かさま応援大使）
- 舞坂ゆき子（女優・かさま応援大使）
- 純烈（歌手・かさま応援大使）
- 岩崎均（ホテルメトロポリタンエドモント総料理長・かさま応援大使）
- 富田治（中華そばとみ田・かさま応援大使）
- 鎌田由美子（㈱ONE・GLOCAL代表取締役・かさま応援大使）
- 小田井涼平（歌手・かさま応援大使）

〈敬称略・順不同〉

安達勇人

星野陸也

畑岡奈紗

Kasama City Guide
The Data File

# 数字で見る 笠間市のすがた

## 気象

| | |
|---|---|
| 平均気温（令和3年） | 14.2℃ |
| 最高気温（平成19年8月15日） | 38.2℃ |
| 最低気温（昭和59年1月20日） | −13.3℃ |
| 年降水量（令和3年） | 1,654.5㎜ |
| 最大瞬間風速（平成30年10月1日） | 35.4m/s |

出典：令和4年度版 統計かさま・市町村早わかり（令和4年7月茨城県）・令和2年国勢調査結果・2020年農林業センサス結果

## 主な農作物

（令和2年）

| 区分 | 栽培農家数 | 耕作面積 |
|---|---|---|
| 梅 | 県内1位 39戸 | 県内2位 8ha |
| 栗 | 全国1位 669戸 | 全国1位 484ha |
| 花き類 | 県内2位 62戸 | 県内2位 115ha |

## 健康・医療

| | |
|---|---|
| 一般診療所数〔10万人当たり〕（令和2年10月1日現在） | 県内23位 53.3施設 |
| 医師数〔10万人当たり〕（令和2年12月31日現在） | 県内4位 329.4人 |
| 歯科診療所数〔10万人当たり〕（令和2年10月1日現在） | 県内17位 46.5施設 |
| 歯科医師数〔10万人当たり〕（令和2年12月31日現在） | 県内16位 65.6人 |

## 観光

| | | |
|---|---|---|
| 年間入込観光客数（令和3年） | | 県内4位 2,635,400人 |
| | うち日帰り客 | 2,471,478人 |
| | うち宿泊客 | 163,922人 |
| | うち県外客 | 1,064,965人 |
| | うち県内客 | 1,570,435人 |
| 正月三が日の初詣客（令和4年） | 笠間稲荷神社 | 240,000人 |
| ゴールデンウィークの観光客数（令和4年） | 笠間の陶炎祭（4月29日～5月5日） | 78,901人 |
| | 笠間つつじまつり（4月16日～5月8日） | 32,563人 |
| 菊まつり関連観光客数（令和3年度） | | 727,000人 |
| 図書館貸出数（人口8万人未満）（令和2年度） | | 10年連続全国1位 約93万6千点 |

## 基本情報

| | | |
|---|---|---|
| 面積（令和3年10月1日現在） | | 240.40㎢ |
| 可住地面積（令和元年現在） | | 139.93㎢ |
| 人口（令和5年1月1日現在） | | 71,901人 |
| 市町村内総生産（名目）（令和元年度） | | 266,110百万円 |
| 産業構造（令和2年10月1日現在（構成比率の母数には分類不能の産業含まず）） | 第1次産業 | 5.96% |
| | 第2次産業 | 26.05% |
| | 第3次産業 | 67.99% |
| 製造品出荷額等〔従業員4人以上〕（令和3年6月1日） | | 160,129百万円 |
| 歳出決算総額〔住民1人当たり〕（令和2年度） | | 582.50千円 |

# 笠間市民憲章

## わたしたち笠間市民のねがい

〈平成19年（2007年）1月1日制定〉

笠間市は、豊かな自然に恵まれ、先人たちが育んできた歴史や文化の薫るまちです。わたしたちは、このふるさとを愛し、市民相互の交流につとめ、「住みよいまち 訪れてよいまち 笠間」をめざします。

- 自然を愛し、美しくゆめのあるまちにしよう
- 健康で働き、元気でいきがいのあるまちにしよう
- 歴史と文化を大切にし、豊かでうるおいのあるまちにしよう
- 思いやりの心を育て、明るいほほえみのあるまちにしよう
- きまりを守り、安心でやすらぎのあるまちにしよう

## 市　章

3市町の合併を意味する強い団結の輪で、笠間市の頭文字「K」を表現。人も緑も水もいきいきと輝く姿や、また列車や自動車道等の交通の要衝としての利便性も表し、「住みよいまち、訪れてよいまち、笠間市」をイメージしました。

## 笠間市の花・木・鳥

〈平成19年（2007年）1月1日制定〉

### 市の花「きく」 City floral emblem : Chrysanthemum

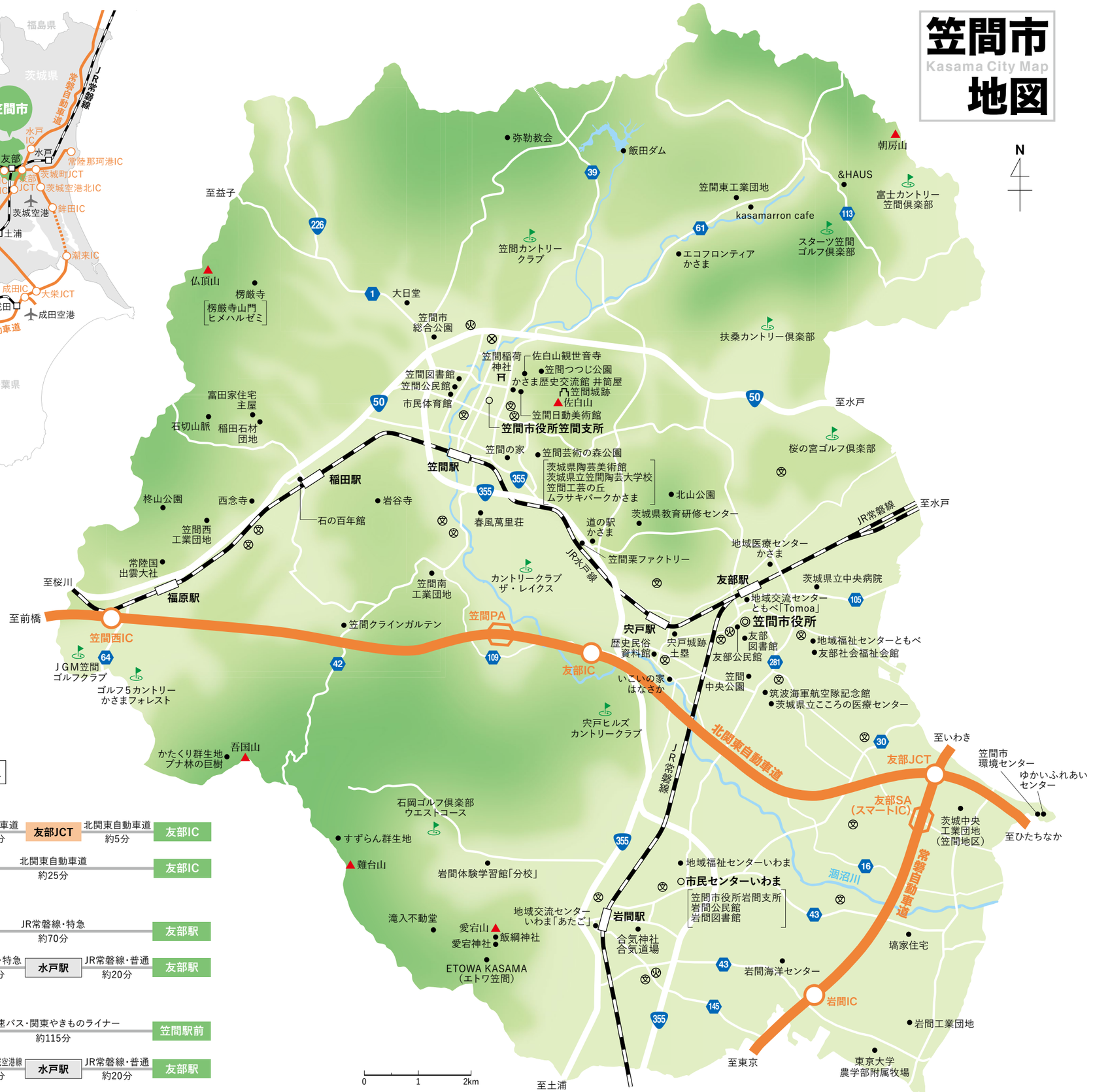
笠間市は、菊まつりや菊人形が有名で伝統があります。また、市内では農業生産としても菊の栽培が盛んに行われています。これらのことからも市民に親しまれている花といえ、笠間市のシンボルとしてふさわしい花です。

### 市の木「さくら」 City arboreal emblem : Cherry tree

笠間市内には、愛宕山、北山公園、佐白山など、桜の名所が数多くあります。春には花が市内全域を網羅して咲き誇ることから、各所で桜まつりが行われていて、市民にとって極めて身近な樹木といえます。このようなことから、笠間市のシンボルとしてふさわしい木です。

### 市の鳥「うぐいす」 City bird emblem : Japanese Bush warbler

笠間市全域に生息しているうぐいすは、鳴き声が美しく、春の訪れを感じさせてくれます。自然環境に恵まれた笠間市をイメージでき、市民にとって身近で親しまれている鳥といえます。このようなことから、笠間市のシンボルとしてふさわしい鳥です。




## 笠間市へのアクセス

**●車で**

**東京方面から**

三郷IC ―（常磐自動車道 約50分）― 友部JCT ―（北関東自動車道 約5分）― 友部IC

**宇都宮方面から**

宇都宮上三川IC ―（北関東自動車道 約25分）― 友部IC

**●電車で**

**東京方面から**

東京駅 ―（JR常磐線・特急 約70分）― 友部駅

**福島方面から**

いわき駅 ―（JR常磐線・特急 約65分）― 水戸駅 ―（JR常磐線・普通 約20分）― 友部駅

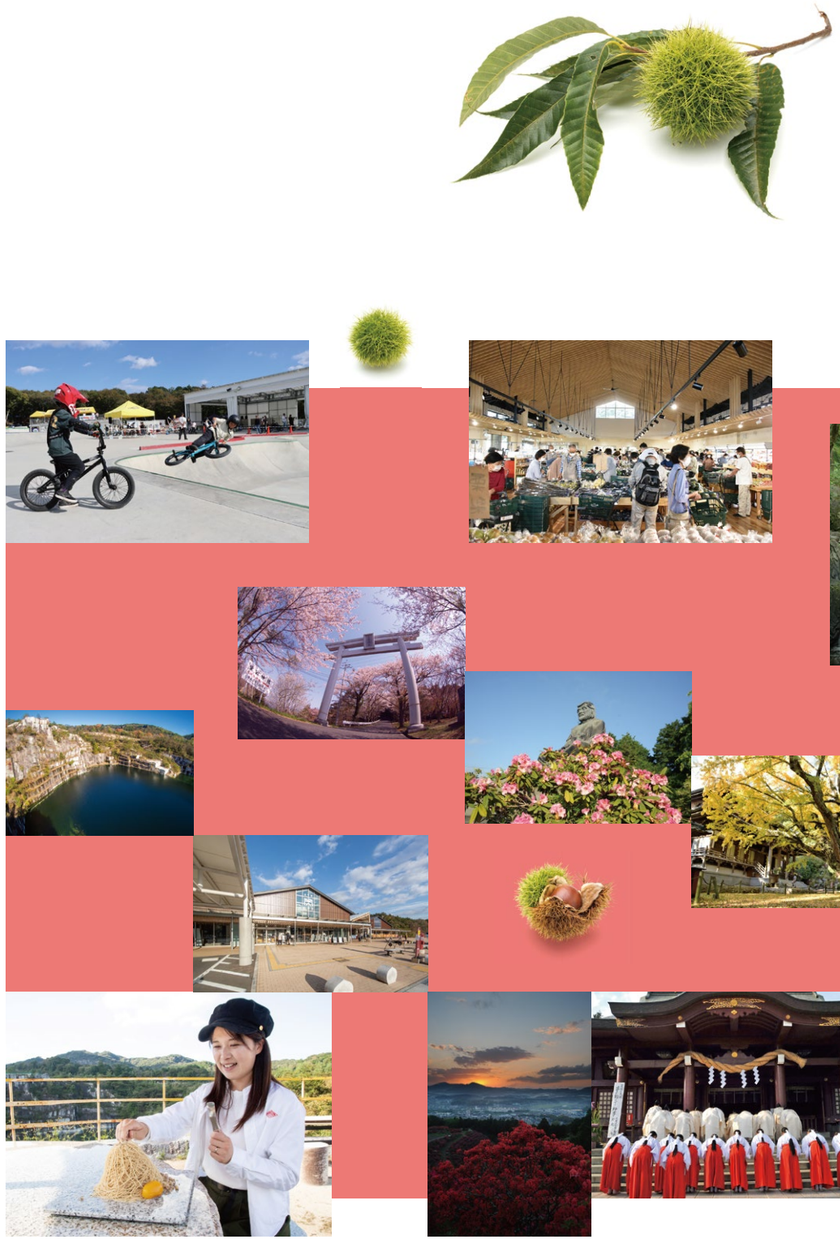
**●高速バスで**

**東京方面から**

秋葉原駅 ―（高速バス・関東やきものライナー 約115分）― 笠間駅前

**茨城空港から**

茨城空港 ―（高速バス・茨城空港線 約40分）― 水戸駅 ―（JR常磐線・普通 約20分）― 友部駅



**笠間市市勢要覧2023**

発行
笠間市市長公室秘書課
〒309-1792
茨城県笠間市中央三丁目2番1号
TEL.0296-77-1101
URL https://www.city.kasama.lg.jp

Secretarial Division, Office of the Mayor
Kasama City
3-2-1, Chuo, Kasama-City, Ibaraki, 309-1792, Japan
TEL.0296-77-1101
https://www.city.kasama.lg.jp

発行日　令和5年3月
Date of issue　March, 2023